第壹卷 第五號

顧問 大隈伯爵

廓清

は公娼問題の外社會及家庭其他一般男女問題の解決を期す

監輯 島田三郎 矢嶋楫子

監輯 安部磯雄 山室軍平

主幹 益富政助

東京 廓清會 發兌

廓清會寄附者

芳名錄（第一回）

金五拾圓也　大隈重信殿
金四拾五圓也　ミステビス殿扱
金四拾圓也　小林富次郎殿
金參拾圓也　老人會殿
金拾七圓也　山室軍平殿
金拾五圓也　島田三郎殿
金拾五圓也　益富政助殿
金拾圓也　江原素六殿
金拾圓也　大江卓殿
金拾圓也　安部磯雄殿
金拾圓也　島貫兵太夫殿
金六圓也　島田三郎殿扱
金五圓也　服部綾雄殿
金五圓也　根本正殿
金五圓也　田中正造殿

金五圓也　矢島楫子殿
金五圓也　山路愛山殿
金五圓也　浮田和民殿
金五圓也　島田信子殿
金五圓也　小崎弘道殿
金五圓也　鈴木文治殿
金四圓也　ビヤソン殿
金參圓也　前田正名殿
金參圓也　宮越信次郎殿
金參圓也　植村正久殿
金參圓也　角倉賀道殿
金參圓也　山脇房子殿
金參圓也　廣岡淺子殿
金參圓也　日向きむ子殿
金參圓也　岸田菊伴殿
金參圓也　柏木義圓殿
金參圓也　田中喜代松殿
金貳圓五拾錢也　旭川矯風會殿
金壹圓也　高崎介藏殿
金壹圓也　コーツ殿
金壹圓也　本多貞子殿

天下の志士仁人諸君の同情に訴ふ

御承知の通り我廓清會は我國數百年來の悪風陋俗たる公娼制度を廢止し、人道上道德上風敎上の一大汚點を芟除するの目的を以て起りたる者に有之候が、抑も此公娼制度たるや、數百年來の悪風にして爲に國民の道德的意識を痲痺せしめたる事長く且つ深くして、今直ちに一般國民をして吾人の主張を理解せしむることすら困難に有之、從つて此重大なる問題の爲に進んで資金を提供する有志者も多からざる事は頗る遺憾とする所に御座候。然し乍ら今や時勢は頓に一變し、物の道理を辨へたる紳士淑女にして存娼の必要を說くが如き人は頗る稀有の事と相成り候。就ては此廿世紀に遺されたる唯一の人道問題を解決し、帝國の領内より忌はしき人身賣買の跡を絕ち、幾萬の奴隸を解放するは今日より適當なる時機なき事と存候。何卒諸君の御同情を以て此事業を援助せられ、本會賛助會員たるの御承諾を得られ間敷候や（賛助會員とは一ヶ月金廿五錢を一口とし其幾口かを御出資下さる〻者に候）尙又御都合上賛助員たることと相叶不申ば雜誌「廓清」の講讀者たる事だけも御承諾を忝う致度候。尙御快諾被下候上は振替貯金口座東京四九五參參番（益富政助）宛御拂込被下度、又普通爲替ならば東京市神田區美土代町三丁目三番地廓清會本部宛に御送金被下度候。以上

OUR CUNTRY IS THE WORLD, OUR COUNTRYMEN ARE ALL MANKIND. 吾國ハ世界ナリ吾國民ハ凡テ人類ナリ

米國奴隷解放論者 ウイリヤム ローイド ギヤリソン氏



I AM IN EARNEST—I WILL NOT EQUIVOCATE—I WILL NOT EXCUSE—I WILL NOT RETREAT A SINGLE INCH— AND I WILL BE HEARD. 我ハ熱誠ナリ 我ハ二言ヲ云ハズ 我ハ容赦セズ 我ハ一寸ダモ退カズ 而テ我ハ聞カルベシ、

THE PURITY

廓清

第五號

明治四十四年十一月一日

論議

斷じて吉原を再興せしむる勿れ

米國スタンフォード大學總長
ギン萬國平和基金管理理事長　デ、エス、ジョルダン

記者足下。公娼制度は實に國家自身の呪詛にして光榮ある日本の名譽を穢す者と存せられ候。幸に烏有に歸したる吉原は再び地上に現はれざらんことを切に希望致候。日本に於ける娼婦の問題に關して特に研究致せし事は無之候へ共其概要に至りては歐米諸國に於ける事情と大差なきことゝ存候。課税されたる淫賣の營業は則ち罪惡を公認する次第にて須て傳染病中最も恐る可き所の病毒の傳染を合法ならしむる事實と相成候。
都市の一部に罪惡と病毒の蔓延を公認し此所に華麗なる裝飾を施し音樂を奏して人目を惹くが如き設備を許すが如きは青年の好奇心や想像力を挑發せしめて遂に彼等を墮落に陷らしむるの罠を設くるに異らずと存候。斯の如き場所は惡風の產源地となり是れより都市の全般に波及して風敎の紊亂を來すことゝも相成べくと存候。世人の唱ふるが如く公認の場所を設くるは其他の場所に於ける罪惡を防止する所以であると云ふこ

とは甚だしき謬見と存候。惡風の中心を設くるは頓て其餘勢が四隣に及ぶ可きは申す迄もなき次第に候。

社會道德の頹敗は既に忌む可き所に候が、更に甚だしきは傳染性の病毒が無辜の妻子の間に其害を逞することに候、醫學上の檢査も決して傳染を防ぐに足らず候。病毒の蔓延は檢黴の如何に拘らず諸種の方面より行はるゝ所に候例へば娼婦は一夜に數人に接するが故に其內一人に病毒ある時は他は凡て之に感染するの危機に遭遇するものと云ふ可きが如くに候。檢黴あるの事實が却て人をして不注意ならしめ敢て危險を冒して不德を事とせしむるに至るに過ぎずと存候。

黴毒淋病の如きは動物性及び植物性の病毒の寄生するに因り病勢の進行甚だ徐々なるに拘らず全治することは殆んど望む可からざる所に候。黴毒は其冒したる局部の細血管を破壞するものにて若し腦を冒さるゝ時は瘋癲となり死に至るを常とし又稀に癒ることあるも終生不具たるを免がれず候。淋病は幼兒に在りては失明となり婦人に在りては不妊となり何れにしても全治の驗を得ること不可能に候。少しく油斷せば一家の破滅を來すことも尠からず候。唯一の策は一度病毒に罹りたる者は之を隔離するあるのみに候。

米國にて娼婦問題を適當に處理せるはアイオワローと稱する方法に候。規定に依れば若し賣淫の事實が發見さるゝ時は其犯罪の行はれたる家屋は犯罪者との間に何等の關係に依るに拘らず一年間閉鎖して何人にも住居することを許さざることに候。吉原の再設は如何なる點より考ふるも最も寒心に不堪次第に候。或は自己の下劣なる慾望の爲めに或は不義の利を得んとする商略の爲めに其必要を感ずるが如き輩は宜しく他の場所に轉せしむべきものにて候。吉原を公認するは政府が罪惡を共同事業として營むの義と相成べく候。歐米諸國に於ては公娼は斷然罪惡と認められ居り候が、小生は如何にしても世界が公娼に失敗したるに拘らず獨日本のみ罪惡を美德に變じ得可きを信じ能はず候。敬具。

世界に於ける廢娼運動

萬國廢娼同盟會
英國支部幹事　モーリス、グレゴリー

左は去月廿一日大隈伯爵邸に於けるグ氏歡迎會に於て同氏の演說せられたるもの也。

△喜ぶべき二個の理由

大隈伯爵閣下、及び淑女、紳士、諸君。私は一大主義の代表者として甚だ不十分を感じまするなれども、此處に立ちて御話しするを得る事を非常なる特權と存じます。私が此の廢娼運動の爲に力を盡し始めたのは私が二十四歲の時卽ち一千八百八十三年からであります。其時から今日まで私は英國に於て三四百の市街地及び政治上の中心地をば絶えず訪問して運動して居ました。又是が爲に歐羅巴大陸に渡つた事が殆んど四十回、米國に往つた事が二回其から印度で三年間を費し、其後又再び印度を訪問しました。そして唯今私が此處に立つて御話しする事を大なる特權と考へますのに二個の理由があります。其一つは既に申した通り私は甚だ不十分なる代表者でありながら、兎に角此大なる有力なる主義、西洋に於ては貴族の人々、青年も老年も、男も女も、大多數の生命勢力を傾注した所の大問題を開拓する代表者として立つ事を喜ぶのであります。他の一の理由は眞に重要なる者でありますが、其は私が大なる高潔なる主義を代表する事を思ふのみならず、此の偉大なる高潔なる國、驚くべき過去を有し、驚くべき現在を有し、驚くべき將來を有すべき

國に來つた事を喜ぶのであります。それで私は何れの新しい國へ來ましても出來る丈け先づ其國の美しい點を見出す事を習慣と致して居ります。そして私が此度上陸致す前からも、上陸の後も此國に就いて矢張其美點を見出す事に努めたのであります。所が私が初めて此日本の景色を見た時の美しい事は終生忘れられないのであらうと思ひます。即ち十月九日の日で未だ夜の明けざる中、美しき敦賀灣の廻はりに數百の漁船が港燈を點じて居る驚くべきイルミネーションを見たのであります。其時私が思ひました事は是は日本の海岸の何千分の一にしか過ぎない。其でさへも此通りでありますれば、斯ゝるイルミネーション斯かる海の豊饒なる生産物が、全海岸線を通じて行はれつゝあることを考へて、非常に驚いたのであります。私は以前、日本は東洋の英國であると云ふ事を聞いても左程には感じませんでしたが、此景色を見て、此語の眞なることを深く感じました。斯ゝる立派な強壯なる漁人を有して居る日本は實に將來世界に於て最大なる海軍國の一となるべく定められて居ると思はれました。

△賞讃に價する日本國民

然るに更に敦賀から東京に參ります途中、此感想は打消されました。其は此の驚くべき國の第二の收穫時で其田畑の光景は實に私が此迄見た收穫の中で尤も美しき者の一でありました。美麗に仕立てたる急行列車が一時間毎に走つて行く間に、土地は隅から隅まで極度に奇麗に耕されて殆んど一尺の地をも餘さぬ様に見えました。そして山でさへも奇麗に立派に築造したる石甃を以て圍み、其上を平坦にして豊饒なる土地となつて居て、見渡す限りが一の廣大なる庭園である。そして、其處此處に餘り遠からざる距離に美麗なる村落があり、少し大なる村は何れも美麗なる學校がある。そして私が此の長き一日の旅行で見た景色は全四千萬

の農業的人民の唯僅かの部分を表はしたる者なる事を思ふ時に、實に東洋の女王がソロモン王の朝廷に招待せられたる時の如く、其驚きを言ばに表はすことも、其半分をも人に告ぐる事は能はざるが如くでありました。殊に從屬せる山脈を超えて雲外に聳ゆる壯大なる彼の富士山は私の豫て斯くあるべしと考へた想像に優つて居ました。更に驚きましたのは、東京に着きませぬ前、東京から數十哩隔たりたる土地まで出迎はれた新聞記者が私に面接して、鋭い寔に意味ある質問をなされた事であります。其中に一人の婦人記者が御出でになつて、英國に於ける婦人選擧問題を尋ねられた時には、私は全く英本國に居る樣な氣持が致しました。又新橋に着きまするとゝ、誠に私が嬉しく感じたのは廓清會の委員の方々や、救世軍のホッダー少將、又勇敢なる山室大佐等のお迎ひ下すつた事であります。其から尤も重要なる事は日本貴婦人方の一隊が迎へられた事で、此方々は此主義の開拓者とならんとする人々で、西洋で働ける同じ働きを此東洋で爲さるゝ所の大なる集合であることを信じます。此外日本及び日本の人々に就いて言はねばならぬ美點は多數ありますが其は他の機會に讓りまして、今茲に私が日本に參りました特殊の目的をお話しする前に、是非とも申上ねばならぬ事が一つ二つあります。先第一は日本の驚くべき器械的の能力であります。私共は歐洲に居つて數年以前より總て日本で出來た色々の玩弄物をば見て居りましたが、日本に參りまして宏大なる新築の建物と今建築中なる壯麗なる中央停車場を見て、此が地震に堪ゆる樣に强壯なる組立を以て建築されて居ると聞きました時に、私は其を賞賛せずには居られませんでした。然し其次の日に尙驚いたのは宮城の偉大宏壯なる城壁を拜觀して、此の同じ原理が其等の石牆に三百年以前より已に應用せられてある事を聞きました事であります。第二の點は日本が男にも女にも殆んど同一の教育を小學校に於て施して居る事であります。其に就ての統計表は私が印度に居りました時印度大學生の爲に屢々引用演說したのであります。又日本の學校に

於ては教師は何等の困難を感せずして其生徒を管理し訓練することの巧妙をば賞讃せねばならぬ。又軍隊に於ける士官と其部下との間には親密なる友情があります。此點は確かに英國の海軍陸軍に於ても學ぶべき所で、其効は大に現はれつゝあるのであります。斯くて日本の全國民は一大家族の如くに、其思想に於て一致し得るので、此點をも注意せねばならぬ事と思ふ。

△公娼制度に反對の三要點

偖此から公娼制度に就てお話申上げたいのであります。先第一に私は此日本に於ける過去十五年若くは二十年の間に、此公娼を廢止しなければならぬと云ふ運動が起つた事を見まして、諸君は歐米の最も善き思想最も進歩した思想と相並んで同じ歩調を以て進まんとなしつゝある事を祝せざるを得ないのであります。國民の物質上の繁榮は無論結構である。智的の繁榮は尚結構である。然し更に道徳上の繁榮に至つては物質上又は智力上の其よりも優つて一層善い事であり、且つ道徳上の繁榮が無つたならば、物質上の繁榮も、智力上の繁榮も永久に存在する事は出來ないのであります。吾人は西洋に於て此事實を明かに見ることが出來る。吾人の美術上の理想は大部分希臘より來つた。吾人の文學上の理想は大部分希臘及び羅馬人の理想の上に建てられたのである。又吾人の法律は多くは羅馬の法律である。希臘と羅馬は昔時に於て偉大なる强國であつたが、二つとも失敗に歸したのは、假ひ物質上及び智力上に於ては二國とも强かつたが、道徳上には非常に薄弱であつたからである。吾人は彼等の長所をば之を採り、其弊害をば之を避けねばならぬと思ひます。其で詳しい事は明晩青年會館にての公開演説に申上げ、又歐洲に於ける各國の狀況を說明する事も其時に讓りまして今日は唯公娼制度が婦人に對する不公平なる制度で、男子に對しても亦甚だ不名譽の者で其性質上

非科學的であると云ふ事を次第〱に全歐洲を通じて、承認するに至つたと云ふ事丈を申上ぐるに止めて置きます。そして此三點は實に私が日本滯在中公開の席でも、個人の談話にも大に辨じたいと思ふ所であります。

△吉原は數十年前より世界に知らる

然し委員のお方の一人は此私の最初の演說で、世界中の何れの國でも日本の如く公娼制度の廣く且つ錯雜して居る所はないと云ふ問題に付てお話して吳れよとの御賴みでありました。成程諸君御存じの如く東京市及び其近傍に五百七十二戶の貸座敷があると聞きました。佛國の巴里は其大さに於て東京と伯仲して居ますに拘はらず、其附近の者までをも合算して僅かに四十八戶しかありません。此に付何卒誤解なき樣に望むは、此數を以て兩市の優劣を云ふのではありません。兩市府とも此他に尙多くの不道德が行はれて居るから此數のみで優劣を判ずる事は出來ぬが貸座敷が表したる特殊の奴隷は唯今申上げた割合に存在して居るのであります。そして私は常に他の國と比較してお話しすることをば致したくないと思うて居りますが、此處で例外に比較のお話をしましたのは諸君からお賴みがあつたからであります。又私は此兩都市の其貸座敷中にある娼妓の數に付てもお尋ねですが、是も其戶數の割合と大概同じであります。日本の公娼制度は數十年以前より歐洲には知れ渡つて居ました。私が最初此に付て大に感じたのは靑年時代で或富みたる少壯の英國人が東洋に來りて、そして此日本で遂に墮落した事を聞いた時に、始めて日本に公娼制度のあることを知つたのであります。其は或時佛國の美術展覽會に於て有名なる續繪が公になつた。其題は「近代の放蕩息子」と云ふのであつたが、其後此書は倫敦でも觀覽に供せられたが其書の一枚は、或富豪なる巴里人が多くの金を以て、

其子の世界漫遊の費用を計算する所であつた。次の畫は其子が東京の吉原に居る所で、其には澤山の燈があり奇麗なる櫻もあつて、美麗ではあるが、其處に罪惡が行はれて居る圖であつた。第三の畫は其子が金を使ひ果して頗る貧困に陷り、當時歐洲人が見て以て最下等なる且つ尤も苦しい者として置いた、普通の人ならば迚も乘れぬと云ふやうな、牛を積込んだ船に乘つて歸つて往く所であつた。第四は其父が一文無しになつて歸つて來た其子を歡迎する圖、最後の畫は全家族打揃つて、已に其罪を宥され美麗な衣服を着た放蕩息子と共に、佛國の有名なる美味の御馳走を互に食しつゝある所でありました。是が私が吉原を知つた始めでありました。

△公娼制度廢止善後策

吉原の燒失は歐洲の各新聞紙に由りて詳しく報せられた。そして此が歐洲人に深き印象を與へ、日本の爲に何事も善かれと希望する人は、日本が再び吉原を建てぬ事を望むであらうと私までも思ひました。併し此吉原の大火よりも尙深く私共を感せしめたる事は、日本の有志家は吉原のみならず、國中を通じて此制度を仆して終はんとて其運動を起したと聞いた事である。殊に或倫敦の共同銀行總支配人の如きは、英國の諸方に二百の支店を有し、年々宏大なる資本を運轉しつゝある者であるが、此廓淸會の運動を聞いて大に驚き且つ喜んだのであります。英國に於ては飲酒問題が國の一大汚點であるが如くに、歐洲の具眼者より觀る時は、公娼制度は日本の一大汚點である。私は反覆して申ます。貸座敷に於ける特殊の形狀をなせる奴隷は日本の其と比較する時は歐洲各國にては甚だ少いのであり、少かつたのであります。加之年々公娼の數は確實に減少しつゝありて、人民の健康上に善良なる結果を齎しつゝあるのであります。そして日本の或新

聞記者が私に尋ねた第一の問題は、公娼制度を廢して其代りはどうすればよいのかと云ふ事であつたが、其は日本人が日本人に對して云ふ事で、其問題に付ては吾々英國人は無關係の事であると答へました。然し私共は公娼を廢して其代りに置いた者は何であるか。第一は若き婦人を助くる爲の『若き婦人の友』と稱する大團體を組織しました。此會は必要ある場合には若き婦人を助けんと盡力しつゝある會員が全歐洲を通じて一萬三千人程と、其爲に造られたる數百のホームとを有して居ります。第二は列國の間に醜業を營ましむる目的を以て若き婦人を賣買することを禁止する協約を締結したのである。歐洲の列强と北米合衆國の元首は皆此協約に調印しました。若も日本國も亦此協約に加入するとせば吾等の喜びは決して尠少ではありますまい。第三は、人類の道德上の標準を高める事の運動であります。英國に於ける此運動の最近なる者は、(諸國にも同じにある)『名譽同盟』で、私も其會員の一人であることを誇りと致します。此始めは或一私人の家の第三階の一室で、市の二人の手代が業務の餘暇に發起したのですが、其後次第に發達し今は二萬の會員を有するに至り、近頃開かれたる年會に我がジョージ王陛下は御懇篤なる電報を寄せられ、出席したる五千の青年は驚くべき熱誠を以て之を受納せられました。此同盟は今や六十人の名譽書記を有する宏大なる事務所を建て、書記は皆今日必要なる各地より驚くべき多數の通信を受けるが爲に各自交代に無給を以て其夕刻の時間を犧牲に供しつゝあるのであります。此二千の會員は其已の權力の及ぶ丈の範圍内にある若き人を助くるが爲に其方法を盡しつゝあり、最近の發展は若き英國人が働きつゝある東洋の各地にも此同盟の支部を起す事となつた。第四は此罪惡の爲に病に罹りたる者を無料に且つ親切に取扱ふ制度の創立であります。そして歐洲を通じて醫者の若き者は公娼の方に走らずして却つて此制度の方に次第〳〵に働く樣になつて來ました。そして此所に一つの喜ぶべき事實は市又は總ての慈善團體が此同盟に付て友誼的の協力を與へ

つゝあることで、歐洲全體を通じて此傾向が日に増し盛んになりつゝある事であります。

△公娼廢止論の要點

此場合茲に明言して置かねばならぬ事があります。私共が今日從事しつゝある奮闘は、「純潔」てふ理想の中心點に對して爲すのではありません。勿論純潔なる徳は個人道徳としては必要なるものである。然し一個人の道徳は社會の幸福に缺く可からざるものであるが、國家又は法律の上から考ふる時は、其よりも大切なるものは個人の自由であります。我が大なる歐洲の廢娼論者の老練家が、我が萬國議會に於て屢々明言せられた如くである。即ち『人民に對して純潔なれ純潔となれと云ふ事が國即ち法律の義務ではない。然し他人の犧牲に供せらるゝ者は唯の一人もなき程に其政權の及ぶ間を安全に保護する事が國の義務である。其管轄の下に各人の自由を保證し、保護せねばならぬのである』と。神は東京に於て、總て日本全國に於て他人の犧牲に供せられたる人が一人も無くなる時を速かに來らし給ふべし。此が私共が確實に熱心に働かねばならぬ所であります。私は亞細亞を通じての此大運動が日本に於ける諸君の働きより發展し來ることを夢想して居ります。諸君が茲に公娼制度を全力を以て粉碎し去り、男子が有する丈の生活を爲す如くに女子に自由を與へんと努力する時に、其奮闘が長くも或は短くも、決して苦しき事業であると思考することを許さぬのであります。苦しくはありません。始終華々しき戰爭であります。若も諸君が此方面に進行する時は、歐洲に於ての如くに亞細亞に於ても同じ利益ある運動者が起つて來ます。如何となれば諸君が此處に雜草を引拔いたとすれば、其跡には此の奇麗なる菊よりも尚美麗なる花が咲きます。古き制度は歐洲に於て滅びつゝあるが如くに日本にても之を滅したならば、其後に日本帝國丈の價値ある慈善的の廣大なる事業が發生して

來るに相違ない。そして日本は唯其一部分を照すよりも、全亞細亞全體を照破する所の者となるであらうと私は希望して居る。

△罪を惡んで人を惡まず

私は此お話で種々なる論點を擧げました。どうぞ私が日本に滯在する間に公開演説に於て或は個人との談話に於て此諸點を詳細に陳述することを望みます。基督教青年會館では親切に私に一室を貸與せられて、其處を事務室と致しましたから、願くは其處に時日を定めて御出で下さらば何時にても御目にかゝります。そして出來る丈問題にお答へ申す積りであります。若も私でお答することが出來ません事でありましたなら本部のゼ子ーバ又は巴里又は倫敦等に居ります老練家に照會致します。尚最後に申述べたい一つの事があります。其は新聞紙の一が、私は吉原の戰を管理する爲に日本に來たと報告して居ることであります。然し私は友愛會の會員でありまして私が關係致します者は何でも平和の戰爭であります。私が日本に來る時に私は何人に對しても決して憎惡の念を抱いては參りません。吉原に於ける所謂樓主は私の尤も惡き者と思ふて居る者でありますが、彼等でさへ私は惡みません。どうぞ速かに他の正當なる職業に代へて、社會を害する代はりに社會を益するが如き方法で、尚多くの金を尚一層速かに得られんことを希望して止まないのであります。此點に就いては誤解なからんことを望みます。

ク氏は目下芝區三田功運町三十番地ポールス氏方に止宿せらるれども、神田區美土代町三丁目三番地基督教青年會館内の一室を以て、氏の事務室に宛て同所に於て、廢娼問題に就ては如何なる人の質問にも應じ又會談をも爲さるゝ筈。

賣奴の弊風再燃せむとするを防ぐべし（二）

前衆議院議員　大江卓

さて是れから今日の藝娼妓は何う云ふ有樣に成つて居るかと云ふ事を一通り研究致しませう。それに就て前にも申上る通り材料を集めてあれば私の議論も根據がありましたが、誠に材料が乏しくそれが爲に何うも根據が弱つくて、咄すにも咄し惡く御聞きになるにも定めて御聞き惡からうと思ひます。

△二十年に於ける公娼の現在數

で此の藝娼妓が何れ程有るかと云ふ事を尋ぬるが一番必要と思ふが、藝妓をする者は何れ程あるか何うも私が調べる事は出來ませんが、娼妓の數丈けはようよう分りました。二十年の調べに依れば全國で二萬七千五百五十九人あると云ふ事は、嘗てさる方より承りました。そこで妓樓の數はと申すと、七千三百七十六軒あると云ふ事です。此は貸座敷と娼妓の數ですが、何んな處に行つても娼妓よりは藝妓が多い。左すれば藝妓の數は餘程之に增しておる事は私の喋々を待ちません、必ずや少くとも娼妓の數と同樣でしやうと思ひます。果して然らば藝娼妓合計五萬五千餘人となります。又他に密娼の數も餘程あらうと思ふが、公娼と密娼の利害の事は即ち道德上の問題にわたるを以て私は敢てお話しを致しません。只藝妓と娼妓の事に就て法律上今日の有樣を觀察した所の御話を致しませう。（謹聽）

△奇怪なる警察令

此法律上の事に就て最も私が奇怪に堪えないのは、明治二十年五月二十三日附を以て第十號の警察令が出ました、其警察令が私の甚奇怪に堪えざる處である。併し乍ら當時の警視總監田中子爵は、最も私が敬信する所の舊友である。上天皇陛下に對し奉り、下人民に對して充分に職務を盡される所の人でござります。先頃警視總監に補せられて以來、人民の權利上に關する改革をなし一々我々の滿足する事を爲されたのである（然り々々）左れば此の警察令に於ても必ず我々の希望を空しくせずして他日改正せらるゝであらうと思ひます。然しながら未だ其改正のない前に當つては我々は意見のある所を述べなければなりません。

△四宿に開業を許さずして何故に獨り吉原のみ之を許可する乎

此警察令と云ふものは全體どんな事の警察令であるかと云ふに、貸座敷引手茶屋娼妓取締規則と云ふので此の第二條に「根津及び四宿（千住、品川、新宿、板橋）に於て新たに貸座敷を開業し、及び他に讓り渡すを許さず。但し引手茶屋は場所の區別なく都て新規開業又は讓渡を爲す事を得ず。」とある。其れに據ると吉原丈の貸座敷は讓渡す事も出來、又新に開業する事も出來るといふ事が裏面に見へておる。何の爲めに斯くの如く吉原にのみ厚くして他の四宿には斯くの如く冷やかなるかと云ふのが不審の一つである。若しも之を增殖させてはならぬといふ事ならば吉原も新宿も品川も根津も同じ事であらうと思ひます（ヒヤ〳〵）獨り根津及び新宿に於ては新に開業を許さぬぞ、又讓り渡しをも出來ぬぞ、吉原は隨意だぞといふは甚だ奇怪千萬な、是はどうしても我々の信じ難い處である。

△何が故に公權剝奪若くは停止中の者は引手茶屋たる事を得ざる乎

又第五條に「未丁年にして後見なきもの、白痴瘋癲者及び幼者を略取誘拐する罪、猥褻奸淫の罪、强竊盜の罪を犯し處刑せられたる者、竝に公權剝奪停止中の者は引手茶屋たる事を得ず」○と云ふの箇條がある。此意味をよく考へて見るに引手茶屋の如き、貸座敷の如きは如何なる商買をなすかといふに、前に司法省の布達に於て藝娼妓は牛馬に等しき者であるといふた、其牛馬に等しき者を以て重なる材料として商買するものであらう。牛馬を以て材料として居る其の人の身分が大切でなくてはならんと云ふは甚だ奇怪の事である。(ヒヤ〳〵)公權を剝奪せられ停止せられたる者は別當や博勞たる事を得ずとの御布告のあつた事はありますまい。又或は代言人村會議員町會議員市會議員國會議員であるとか云ふ樣な人は、或は公權を停止せられて居れば無論なられぬ、何故なれば公權によつて立つ人であるからです。然るに女郎屋の商買をするとか或は引手茶屋をするとか、別當になるとか御者になるとか云ふやうな事は、公權停止中位は別段差支へない商買ぢやありませんか。(ヒヤ〳〵)然るにそれを誠に上等の商買として國會議員など丶同じ樣な性質を有つて居る者の樣に大切にするとは、幾分か此業の增殖を謀ると云ふ方の傾きが有りはしまいか(ヒヤ〳〵)それさへ無ければよろしいが、兎も角も此警察令の精神と、司法省の布達の精神とは撞着して居ると言はなければなりません。(喝采)それから又第九條に「免許鑑札は他に貸與し又は抵當質入等をなす事を得ず」とありまして、是れは誠に僅かの事の樣でありますが、能く翫味して見ると餘程束縛を與へるの方便になつて居る。成程法律では束縛を防いでゐるが、却つて反對の結果を生じました。今日の事實は何うなつて居るかと云ふに假令ば警察官が藝妓を押へて鑑札を調べたなれば一人の鑑札を携帶して居る者もあるまいと思ふ。それは何

故なれば、或者の探偵する處によれば此藝妓に種々種類があつて、自前といふ藝妓は獨立して自ら門戸を張つて稼いで居るので、是れは假しや他人から金を借りて居つても權利上少しも束縛を受けて居らぬのである。又抱へといふ藝妓がある。其抱へ藝妓の内に折半或は全抱等の區別がある。此種類に至りては鑑札は決して自分に持つ事が出來ない、其譯は若し鑑札を當人に渡して置けば警察署か區役所に往つて返上するの權利が有るから、それを返上して他に轉籍する事が出來る。それを防ぐ爲に金を借した抱へ主が中々其藝妓の自由にさせない、返上の出來ぬ樣にちやあんと簞笥の抽斗に仕舞つて有るから（聽衆失笑）何うしても其抱への藝妓が持つて居る事は出來ない。矢張り娼妓も左樣である、此娼妓の鑑札は多分抱主即ち貸座敷の主人が預つて居るだらうと思ふ。（けれども私は能く聞いて見た譯では無いから知らないが）その藝者の例に依つても多分其抱主即貸座敷の主人が是れを預つて居るだらうと思ふ。それは後のお話しに致しませう。

△娼妓が轉寓若くば廢業せんとするを故障し得る當然の理由とは何ぞや

誠に政治家と申す者はうるさき者で藝妓の始末から女郎屋の事迄穿鑿を仕なければならぬが、實に斯う云ふ事はお咄し申すも、いやそれを又諸君がお聞きになるのも誠に蒼蠅く且つ穢らはしき事で有らうと思ふが、是等の事によつて實際を調べなければ政治上の觀察を爲すに大なる考へ損ひがあらうと思ふ。（喝采）又此娼妓の權利を保護した箇條がある。そは何かと云ふに第三十四條に「娼妓轉寓廢業又は他出せむとする者ある時は、當然の理由なくして故障すべからず」と有る。此當然の理由が何處にありませう、娼妓其人自身が廢業したいと云ふのに不當然の理由がありませうか、……私は斯う云ふ理由を政治上にも道德上にも見ず、

又學術上にも宗教上にも何處を捜しても娼妓を止めたいと云ふ事が不當然であるといふ事は決して有るまいと思ふ。(喝采) 然るに此規則には當然の理由なくして廢業に故障する事は出來ん、當然の理由があれば故障が出來ると云ふ事になつて居るのは甚た奇なる事である。若しも娼妓を止め度いと云ふに故障し得る當然の理由の有る者にやと私は三日の間考へたが、何うしても考へ附かない。若しも滿堂諸君の中に御名案があつたら御敎示を願ひ度い。是は娼妓の權利を保護して居る如くであつて、其實は却て貸座敷の權利を保護したもので、斯う云ふ處が此規則の餘程意味のある處だらうと思ふ。其外言外の意味は私が申上げずとも聽衆諸君に於て御翫味を願ひます。

△娼妓逃亡届は金銀貸借關係を人身束縛に至らしむるものに非る乎

尚第三十八條に「寓居の娼妓が逃亡又は立戻りたる時は其貸座敷主に於て取締加印の書面を以て警視廳に屆出づべし」と云ふが有る。若し抱えの女郎が逃げたら取締の加印を以て逃げた事を警視廳に届ける、警視廳は其時何う云ふ事を致しませう、私の考へには娼妓は貸座敷の外へ出る事は出來ぬ、親が罹病とか墓參をするより他は戸の外に出る事が叶はぬ（但し吉原廓内は宜しいと云ふ規則になつて居る）それ故に若しも娼妓が吉原の外に逃げて往つた時は是を取捕へて吉原に連れ込む事が出來る。又品川の娼妓が町に出た時又洲崎に往つた時には早速是れを取捕へて元の貸座敷に戻す事が出來る。それ故に是等の箇條は誠に差支への無い樣ではあるが、中々娼妓の權利上大變な干係を持つて居る箇條でござゐませう。(ヒヤ〳〵) 誠に殘念なる事は娼妓の證文を取る事が出來ず漸く其寫しを貰つたが、寫しでは諸君も御滿足なさるまいと思ふ。これは

實に遺憾でござゐます。先づ娼妓の證文は悉く二通で有つて金を借りる證文と其の金を返さない中は身體の自由を抱主に任すと云ふ證書との二通になつてゐる。扨て警視廳に持つて出るのは彼の借用證書であつて、今一つは內處の證書、此又內處の證書が彼等に取ては大變力ある者である。娼妓であれ藝妓であれ其の內處の證文を裁判所に持つて往けば反古同樣だが、或は力の足らん爲か左はせずして內處の證文を大切に守つて之を金城鐵壁と思つて居る。返す〳〵も箇樣な反古紙同樣の物を誰に詐欺された事で有るか、或に無心で居るか、倘くば道德心とでも申しませうか、固く其の約束を守つて居るから僥倖にして彼の抱主等も法律の制裁を受けずして、娼妓を隨意に使ひ藝者を隨意に致す事が出來るが、若しも藝娼妓にして此事を知つて逃走したからとて法律の上では金銀貸借りの點から其身の束縛を受けるの理由は無いから『私は彼に金の貸しが有つて未だ拂はない年期中であるからお引戾しを願ひ度い』と警視廳に願つた日には人身は自由ぢや決してそれは出來ぬと被仰るだらうと思ふ。然るに此の規則には娼妓は廓內より出る事はならず、戶口より出る事は出來ぬと云ふ事があるから、其範圍內に於て逃亡の娼妓を連れて來るは警察官の權利に有るとは誠に味ひ善い文句に出來て居るでは御座居ませんか。(滿場大喝采)そこで私が改正を望めば、斯うしたならば如斯の不幸の地位に陷つて居る、女の權利を伸べる事が出來るか知らんと思ふのは、若しも此後に及んで逃亡した者は再び女郎になる事は許さないと云ふ事にしたなれば、或は其權利を保護する事も出來、又政府が其增殖を防がねばならんといふの御趣意も立つだらうと思ひますから、斯う云ふ事に改正したら如何な者でござゐませう。(ヒヤ〳〵)

又四十一條に「娼妓免許の期限は滿三年以內とす其の期限滿ちたるものは、貸座敷と結約其他如何なる事情あるを問はず鑑札を返納すべし」とありて、假令ば貸金が有つても其貸金には拘らず止めなければならな

い。勿論借りを拂はないで宜しいと云ふ譯は有りませんから、後で拂ふとも先づ娼妓丈けは借金の有無に拘らず、營業せねばなりません、處が又第四十二條に至りまして若し更に願ひ度い者があれば、最う三ケ年丈けは許す事が有る、是れ又面白い意味が含んで有ります。詰り前後六年間は娼妓營業が出來る樣です。若し其親が惡い奴ならば六年間我娘を賣る事が出來ると云ふ有樣になつて居る。是は決して三年に限つた規則が有るから是で大丈夫だと思つたら大違ひ、望む者があれば最も三年丈けは許すといふ規則が有るから却つて後三年の勤めが大丈夫出來るので有る。假令ば本年五月三十一日が期限で有るが或は其事が案外に出で丶二十一二で出る人は少く、四十餘りの婆さん斗りで、若い者は必然願繼ぎをするに相違無いと思ひます。(喝采)

△娼妓の種類

前申述べたる通り今晩の演説は廢娼演說會と云ふ事で、娼妓の事に關つた咄しをせねばならぬのに、前に申した通り娼妓の證文を手に入れる事が出來なかつたのは誠に遺憾であります。遺憾では有りますが寫し丈けは手に入つたから、其證文は金の借りと自分の身を樓主に任して居ると云ふ二つでござります。さうして娼妓にも其種類が三つ有る、即ち金で抱えられて最も一身の自由を賣つたと同樣の者之を全抱えと云ふ。扨私が咋年の夏廣島に參つて歸りに小蒸汽船に乘り彼の內海を戻る時に、女が三十人斗り何だか怪しいのが帶も結ばずに乘つて居り、又其の處に洋服を着た人が一人居りまして、其洋服を着て居た人の側から右の女に向つて彼是と差圖を致して居る下男らしい人が一人居りまして、其人の服裝を見ると雨も降らないのに雨合羽を着て恰で演劇でする女衒と云ふ風な人で有りました。その男が女連に向つて其方へ行つてはならんとか此方に居るがいゝとか云ふて種々差圖をしてゐました。それから其連中も私と共に神戸に上陸したので有

りますか、其上陸する前にあの棧橋を渡る時の有樣などは實にどうも申樣も有りませんでした。船に乘つて姿體はやつれ島田髷はこわれ、浴衣の上に帶も結ばず歩く樣は實に見られたものではありません。その時に私は或人にあれは一體何者であるかと云つて聞いた所が、あれは廣島縣下の名產で大抵東京に往く所の女郞であると斯う申しました。其時に私は吃驚して實に澤山の女郞ではないか、恰も奧州から博勞が馬を牽いて來る樣である。(大喝采)成る程司法省の布告に牛馬に齊しきとは此處であると考へました。(ヒヤ〳〵大喝采)即ち是等が全抱えになつて自分の權利と云ふ事は毫しもなく、帶から足袋から頭の物迄皆貸座敷で拵へて遣るのであります。それから又飯代と云ふのが有る、是は只飯の代丈け拂ふ譯で上方邊りに澤山行はれて居りますさうです。例へば一兩の玉代を以て一晩お客を勤めれば二十五錢貸座敷にやり、自餘の七十五錢は自分が取つて衣服等の諸費は皆自分持であります。又折半と云ふて半分は樓主にやり他の半分は自分が取る是れには或は接客衣は主人で拵へ寢衣と夜具は自分で拵へるとか云ふ樣な種々な定めが有るさうです。

△之即ち賣奴の弊風再燃せるものに非ずや

藝妓にも其通り自前と云ふのが有る。それは前に申したる如く自分で門戶を張り何の某と云ふ提灯を點けて獨立して營業して居るのでございます。又其家にも抱への藝妓が一人か二人は居るが、其抱へにも矢張り全抱へだの折半だのと云ふ種類が有るさうです。扨て娼妓は素より淫を賣のが商賣でありますから兎も角、藝妓の中に假令ば折半であるとか全抱で有るとか云ふものには、抱主は何う云ふ仕向けをするで有らうかといふ事は考へねばならぬと思ふて、或新聞の探訪に賴んで之を聞いて見ると、此の全抱へと云ふ者の中にも細別すれば種々の種類が有るさうです。先づ殘酷な家では衣物もお客に出る丈けの衣物を着せて遣るが、其

他は傘も下駄も買つて遣らない、且つ貰つた玉代は自分の身の代の爲めに取られ、加之に御祝儀迄抱主に取られるのであるから、是非とも何か其外に働いて簪とか頭の物であるとか或は傘とか下駄とか其他の小遣迄も自分が仕なければならない。是れは取りも直さず内々淫を賣れよと指揮するのと同じ事で(喝采)此の使ひ方も實に殘酷な使ひ方である。併し其種類や何かの事は兎も角も凡て藝妓で有れ娼妓で有れ他人の娘を抱えて置いて自分は左團扇で暮さうと云ふのは、どうしても人の權利を奪つて居ると云ふは免れない事實であります。既に天賦の自由を害する事でありとしたならば、自由主義を取る所のもの各權利を平等に與へんければならぬと云ふ趣意に背いて居るから、政事上に於て是非とも之を改良せんければならぬと云ふは、政治家たる者の最も勤めなければならん事と思ひます。

そこで全抱は如何なる殘酷な事になつて居るかと云ふに(證書を示し)此證文は少し年立ちたるものなれ共藝妓の證文の本書で、實印も押してあるのですから充分證據となりませう。之に依つて見ますと全く人身賣買に屬してゐる。只今朗讀致して諸君の御注意に供へます。(謹聽々々)。

借用證之事

一金五拾圓也

利子之儀者規則の通り

右の金子正に借用申候處實證也。返濟の儀者明治十三年一月三十一日限り元利共返濟仕候。若し其期限に至り滯候節者龜鶴屋に預け置候しめ子の身の上は貴殿の御存意通り如何樣に御取り計らひ成され候とも御勝手次第に可被成候。依て自分共に於て後日に至り一言申分無之候。爲後日借用證文如件。

明治十二年十一月

神田三崎町二番地
何　誰　某　㊞
何　　　某　㊞

右證文の姓名丈けは憚りて讀みません、是は全く私の娘を御處分下さいと云ふ證文にて、丁度物品を賣買するのと少しも變らない。所謂人を物貨にして賣買したのと同じである。（ヒヤ〳〵）即ち私の申す賣奴の弊風が再燃致したのである、依つて諸君と吾々は義務としても充分に之が防ぎをしなければならぬ事だらうと思ひます。（滿場大喝采）又其外折半の證文も皆此通り（證文を示す）有りますが餘り長くなつて却て猥褻に涉りますから、只諸君にお目にかけて置き私の論據は皆證文に實印を捺してあると云ふ事丈を明にして置きます（證文の捺印の部を示す）（朗讀を乞ふ）併し今も申す通り餘り長くなりて却て猥褻に涉る樣ではいけませんから。………（半分でも宜しい）

そこで此證文を以て買入られて居つて、加之に其鑑札と云ふ者を預かられて居るから、よしや其處の家が殘酷であるから他家に往つて商買を致し度いと思つても、返上する鑑札が無ければそれも出來ません。併し乍ら吾々が考へて見ると實は智惠の無いので有る、若しも返上をいたしたいと云ふ塲合があれば警察署へ駈込み訴訟をして、妾の鑑札を抱主が隱して仕舞つて渡して與れません、何うぞあの鑑札を渡して與れる樣に御說諭を願ひます。と云へば直ぐに警察署の方で取扱つて返して下さるに相違ない。然るをそれ丈けの智惠の無いのは或は其邊に氣が附かぬのか、又は馬鹿正直なのか隨分殘酷な目に遭ふて居る者があるのですが、つまり是等の人々は無智者と見へまして、吾々は智者の地位に立ち、さう云ふ人を救ふ考へを持たなければなりませぬ。（ヒヤ〳〵）

調査及研究

和歌山縣廢娼の効果

和歌山新報主筆　安江稻次郎

（一）

和歌山縣に於ける所謂公娼なるものは、維新革政の當初に於て既に全く是を廢止して今日に至つたのであつて、幾度か遊廓設置運動の猛襲にも會つたが、常に有力なる志士等に擊退せられ、幸に誇るべき習俗を維持し得たのである。

嘗て伯爵清棲家敎氏（現新潟縣知事）が和歌山縣知事在職中にも遊廓設置の運動が起つた。當時之に對し我和歌山新報では反對派の急先鋒として、紙上は勿論盛んに演說會を開き、遂に縣會議事堂に押寄せて之を包圍し、示威運動を試みるといふ樣な猛烈極まる運動もやつた。基督敎會の人々も大に盡力されたが、恰も當時市會議長をして居られた、森懋と云ふ人が、私等と同樣、反對者で、清棲知事を訪問して設置の非なるを說き、又現に和歌山新報の社長たる久坂豐忠氏の如きも熱烈なる反對論者で、知事はこれ等の意見を容れ鈐印を與へた。乍併知事は、『既に縣會では郡部に遊廓を設置するといふ事の決議になつてゐるのに拘らず、市會では全會一致を以て否決し、つまり、縣治が二樣になり、內務省へ報告するにも甚だ困る。孰れか一つにしなければならぬ。』といふ樣な譯で、其立場に就て非常に困つて居つた。然るに此森市會議長は頗る情誼に厚い人で、清棲知事の立場に同情して鈐印は貰つたけれども一先づ決議を延期する事になつたのである。今日から思へば實に遺憾な事をしたもので、遂に知事は新宮といふ所に遊廓の設置を許した。而もそれは清棲知事が他縣へ轉任の三日前の事であつた。

其許可した理由としては、新宮は非常に風紀が惡いから、公娼を設置したならば是を矯正する事が出來るであらうといふのである。由來此新宮といふ所は有名な材木の產地であつて、大和方面から產出する材木を新宮迄持つて來て商ひをする程で、非常に巨額な取引をするのである。從つて材木商人は極めて贅澤な生活をしてゐる。で町民の方からは斯ういふ金使ひの荒い所に遊廓を設置したならば、新宮は必ず繁昌な町になるだらうと考へた、町民等は即ち此の意味に於て遊廓設置を賛したのである。材木商人が金を蒔いて新宮は大きな町になるだらうといふ淺薄な夢を見て居つた。即ち第一の理由は土地の風俗を矯正する事、第二は町の繁榮策たる事、此二點によつて遊廓を設置したのである。當時土地の警察署長をしておつた某が、窃に土地を買つて置いて、愈々設置といふ事の決定するや否や、警察署長といふ榮職を弊履の如く捨てゝ、忽ち女郎屋の亭主と化けてしまうて、今も現に女郎屋の亭主をしてゐるが、警察官として風紀の取締をする身が、あべこべに地位を捨てゝ自ら風俗を亂し惡業に從事したといふ樣な奇怪な事實もあつた。

而して新宮なる土地が、遊廓設置以後、果して當初豫期の如き效果を收め得たであらうか、何んぞ圖らむ結果は全然之れと反對の現象を呈したのである。新宮には先に六十名ばかりの藝妓がゐたのみであつたが、遊廓が出來てからは、多數の公娼が出來た外に、六十名であつた藝妓即ち私娼は、百二十名に增加した。獨り此事實のみを以ても風俗の矯正どころか、反對に攪亂されたといふことを知られるのである。

新宮は固より田舍であるから、女郎屋の設備は至つて不完全たるを免れない。從つて少し奢つた商人等は遊んでも面白くない、金のある材木商は勢ひ他の土地に行つてどんちやん騷ぎをやる。持つて來られた土地こそいゝ迷惑であるが、其れ等の商人の番頭なとは、やはり此土地で家を空にして遊びに夢中

になり、遂には主人の金を胡魔化して損耗をかくるといふ様な、實に始末におへない有樣となつた。醇朴であつた新宮はあたら惡魔の巣窟と化して了つたのである。

從來此新宮と云ふ土地は夜も戸を締める事なく、障子一枚で安眠の出來た所であつた。といふのは風俗が醇朴なのと、氣候が温暖で、冬なども雪の降つた事がないといふ様な土地だからであつたが、一度遊廓なるものを設置してからといふものは、泥棒は多くなるし風俗は益々亂れて來るし、加之に自分の家の使用人が夜になると女郎屋に遊びに行く、翌日仕事をするといふ時になると前夜眠らないものだから眠たくて堪らない。そこで見張りとか何とかいふ名目の下に、木場に行つて材木の下で晝寢をするといふ有樣。主人は斯くてはならぬと戸締りを嚴重にして一方泥棒の要心をすると共に、他方使用人が密に拔け出すのを防いだ。今迄開放主義であつたものが、遊廓の爲に戸締り迄嚴重にしなければならぬ事

となり、町民は今更ながら風紀の紊亂に困つてゐる。實にどうも飛んだ結果になつたものである。

此新宮の外に今一ケ所設置せられた。其場所の名は今記憶して居らぬけれども、何でも四五軒は建つた。併し邊鄙な所であつたから、直に自滅の運命に陷つて今のところ一軒もない。

（二）

以上は私が和歌山縣に來る前の出來事であつて、記憶に辿つて書いて見たに過ぎない。自分が和歌山縣に來たのは昨年の事で、恰度此時も公娼設置の議が持上つてゐて、市會の問題となつてゐた。

市會議員は普通三十三人で、當時四名缺員になつておつて、其中十六人が公娼設置反對論者で、殘りが設置論者であるが、彼等の後には勿論女郎屋の亭主がゐるのである。それは大阪のある女郎屋の主人で、大阪は非常に警察の取締りが嚴しいのでやりきれないから、何處かに適當なる土地を撰擇して不義の慾望を充さうとして、多額の金を費つて此和歌山

に設置運動を起したので、我和歌山新報を始め有志家は、極力是が防禦掃攘に努め、大に反對運動をやつた結果、贊成論者の中には心を飜す者もあつて、よく記憶してゐないが、たしか十三人になつたと思ふ。そこで贊成者の側ではこれではいかぬと思つたのか、贊成側の大堀といふ者が、反對側の柴と云ふ人を小刀を奮つて斬つた。爲に議場は騒然として名狀すべからざる混雜を呈した。併し是は只贊成派が自黨の勢力を維持せんが爲めの策略で、自分の味方を取られぬやう威嚇せむとする狂言に過ぎないのである。一方吾々の方では、市内辨天座に於て市民大會を開いた所、聽衆無慮二千五百人といふ空前の盛況で、而も一人の異議者もなく滿堂一致立ろに遊廓設置反對の決議をした。又同時に之を贊成したものは將來市の公職に選擧せざる事といふやうな議決をした。東京からは杉村楚人冠氏、其他矯風會、基督敎會の人々も盛んに應援し、或は演説會に、或は贊成者の家に各戸訪問をする等、其意志を飜へさしむる事に努めた。自分は時の知事川上親晴氏を訪ふて大に意見を陳べた。然るに知事は幸に『格段の事がない以上、即ち和歌山縣全體の風紀が全く紊亂して公娼を設置する外之を矯正する事が出來ないといふ樣な、格別な場合でない以上は遊廓は設置しない』といふ事を明言せられ、見事に魔軍を擊退する事を得た。

（三）

一體和歌山は關西に於ける有數の工業地で、有名なる綿ネルの產地である。日露戰役當時の如きは年額一千萬圓を產出した。今は平均七百萬圓位と覺えてゐるが、兎も角日本の綿ネル產額の六割を占めてゐるのであるから、從つて是を製造する所の職工といふものが澤山ゐる、七萬の人口中三割は其職工である。

然るに此職工の風俗が極めて醇良であつて、仕事を終つて家に歸る時には綺麗な着衣を纒ふて、體度と言ひ、風采と言ひ少しも良家の番頭など丶違ふ所

がないのである。此綿ネルの事業といふものは時期があつて一年の中四ヶ月は休みで八ヶ月働くといふ様になつてゐる。で如斯四ヶ月間は遊ばねばならぬから、自然働く期間の八ヶ月に其四ヶ月間の餘裕を作らなければならぬ。そこで彼等は八ヶ月間に於て出來るだけ働いて必ず貯へをすると云ふ勤儉貯蓄の良風を生じ、暮し向きに就ての心配が却つてないのである。之は確に攻究を要すべき問題で、怎うして斯かる良結果を來してゐるであらうかと云ふと、それは無論公娼のない爲に此善良なる風俗が生れたのに外ならぬ。思ふに若一朝公娼なるものが設けられたならば、忽ちにして此善良なる風習は破壊せらるゝであらう。大阪邊りから來た職工等の中には、態々汽車に乘つて大阪迄女郎買に行く者もないではないけれども、それ等は到底永く續かう筈はなく知らず〳〵良俗に感化せられて了うのである。

　壯丁檢査の上に表はれた統計によれば、三年前に於ては梅毒患者の少い點に於て第一位を占めて居つた。昨年と今年とは遺憾ながら第六位になつてゐるが、決して悪い方ではない。それは六位になつた事は非常に殘念な次第ではあるけれども、尙花柳病がないと云ふ事を誇り得るのである。然らば兵營に這入つてからの狀態は怎うであるかと云ふと、今年私は直接軍隊の司令官を訪問して其成績を聞いて見たが、花柳病患者は二人しかないと云ふ事である。一人は他から這入つて來た者で這入る以前に旣に花柳病に罹つてゐたので、今一人は大阪に行つて傳染したのだといふ。そして司令官は更に語をついで『公娼を置く等と云ふ事は容易ならぬ事で、軍隊の風紀上非常なる害毒である云々』と云ふてゐた。和歌山には、中學校が二つ、農林學校が一つ、商業學校が一つあるが、其生徒は皆悉く健全で、花柳病などに罹つてゐる様な不都合者はない。又犯罪人はといふと、今茲には統計がない故詳細を示す事は出來ないけれども他の土地に比して非常に少い、少い點に於て第三位を下らないのである。私生兒の如きも極

めて少く、要するに風俗は醇朴と云はねばならぬ。

此醇朴なる土地に持つて來て性懲もなく復近頃遊廓設置論を持出した。私共の方でも大に運動をして知事を訪問し自分等の意見を陳述した處、知事もそれを容れて、遂に設置案は又却下されて了つた。斯うなつて來ると思惑の違つた連中は多大の損失なので、圖太くも彼等は又再び建議すると云ふ事になつた。恰もよし當時内閣の更迭と共に知事は辭表を提出し、之に代つて赴任せられたのは此前の川村知事で、早々私は氏を訪ふて意見を叩いたところ、川村知事は『公娼問題が人道に反して居るか、反してゐないかと云ふ事は暫く別問題として、之を以て市の繁榮策にするなどと云ふが如きは以ての外である。』と云ふやうな話であつた。斯如和歌山市が明治初年から一度も公娼といふものを置かないといふ、尊ぶべき誇るべき歴史を有し、而も醇良なる習俗を維持せる事は、公娼を置くがいゝか置かぬ方がいゝかといふ問題の試金石として、和歌山市の成績は洵に好箇の材料を提供してゐると言ふ事が出來る。

（四）

此頃大阪では公娼に就て非常に嚴重なる取締規則を設け、彼等醜業家の頭上に一大鐵槌を下したが、東京も何とか早く此惡俗を取除き度いものである。此點に於ては我和歌山は、當局其人を得てゐて、警察署長武田巖作氏の如きは非常に此風俗の點には重きを置き、藝妓が外泊でもしやうものなら、どし〳〵檢擧して拘禁する。和歌の浦といふ所があるが、それは中々風景に富んだ處で、往時、聖武天皇が玆の風致を愛でさせ給ふあまり、和歌の浦の玉津島といふ所に風景を祭られた。風景を祭るなどゝいふ事は隨分珍らしい事で、それつ位であるから材木商人共は皆此和歌の浦に客を招いて御馳走をする。所が此武田署長は頗る嚴格な人であるから、そこに藝妓が一晩でも外泊するといふと遠慮會釋なく二三日なり四日なりの拘留を命ずる。這麽有様であるから風儀は益々よくなる。そこで吾々同志は同志會なるもの

を組織して益々其基礎を鞏固にし、賛成派議員を全滅せしむる事に努めてゐる。此間も賛成派の大堀といふのが縣會議員の候補者として打つて出で、賛成側の新聞は盛んに是を褒めて煽動し、中々大した勢であつたが、私共の方でも初は默つて居つたけれども遂に默視する事が出來ず、今から思へば隨分常識を逸したと思ふ迄論戰を試みた。其結果五人の候補者中最少數を以て落選といふ頗る憐れなものであつた。それで私共の噴飯に堪へないのは彼等が唱ふる所の所謂賛成論なるもので、『「肉慾はどうしても人生に取つて必要なものである。殊に我和歌山市の如き勞働者の多數を占めてゐる處は、情慾を無理に抑壓すると頗る危險である。藝妓と云ふものがあつても其は中流以上の者の對手となるもので、下層の勞働者に對してはやはり公娼を置くの必要がある。唯無暗に抑壓の結果は、やがて無政府主義の如き危險思想の勃發ともなる。見よ現に幸德一派の中には四人まで我和歌山縣から出てゐるではないか、之れ畢竟公娼を置かない結果である』」と云ふ。誠に滑稽至極な觀察で、危險思想の犯罪者と結びつけたなどは實に笑止千萬で、彼等は我和歌山市から出たのではない、前に述べた處の公娼を設置せる新宮から出たのではないか。若しもいふが如く危險思想と公娼と何等かの關係あるものとすれば、賛成論者自ら自己の立場を覆してゐる自家撞着の議論であると、大に反駁して完膚なからしめたが、遂に一言も答ふる事が出來なかつた。

先づ和歌山縣に於ける公娼問題の現狀は、大體右の通りであるが、數字を以て統計的に之を說明しなければ、恰も歷史を說いて地理を示さぬ樣なもので、洵に物足らぬけれども、何分旅中の事とてそれ等の用意もないから、甚だ乍遺憾他日改めて實際上の統計表を示して再び讀者諸君に見ゆるつもりである。

廣く同志の入會を望む

日本に於ける娼妓制度の歴史（二）

佐世保日々新聞主筆　金子克己

はしがき

益富氏が鐵道青年會の事を以て、九州漫遊の途次佐世保へ來られたる際、畏友福岡磯次郎君の紹介を以て始めて相知るを得た。氏は熊本に到らんとし、予は福岡に行くべき處であつたので、鳥栖迄列車を同ふして、雜誌『廓清』の事を聞き其の尊敬すべき意見を拜聽する光榮を得た。予も島田先生等によつて、斯の會が組織されし事は疾く承知して居た。時恰かも佐世保市では、現警察署長竹尾英敏君によつて風紀取締が勵行せられ、市中に散在して佐世保市を腐敗せしめつゝある賣淫の驅逐掃蕩を行つて、大に市の面目を改めんとする際であり、予も亦『藝妓、娼妓、淫賣婦』と云ふ題を掲げて、先輩の意見や、その研究になりしものを引用して自己の新聞紙に論じて居た時であつたので、益富氏の熱心なる説に對して、幾分か自己の信念を吐露して相酬ゆる事が出來たのを悦び、手を分つ時に御參考にもと卑見を認め、差し送るべきを約したのが此の稿である。未だ意をつくさぬ處もあるが、他日に讓るとして、左に述べしは先輩の研究になりしものを引用した迄で僅かに卑見を加えたに過ぎぬ。

△遊廓は斯の如くして出來た

▼藝娼妓淫賣婦が世の中に存在する所以の理窟は多々あるであらう。克己心の薄弱なる男子の慾情と、卑屈にして自我に乏しひ女子の慾情とが、相應じた故で德教の力が微なるに歸するは勿論である。つまり一面よりすれば社會組織が不完全なる結果、即ち此の厭ふべき現象を存在せしむるの已むを得ざる事となるので、都會が之と大關係あるべきは勿論である。

▼猶太とマルタの古譚に記されたる紀元前千七百年の事や、基督教、佛教等の經典中の事實は玆に説か

ずとして、我邦では千年前後に淫賣婦があつて漸次世が降るにつれて增加し來りたるものと思はれ、豐臣氏の時代に京都、大阪、奈良等に數十ヶ所の遊廓を開く事を許したが、之は新設でなく足利氏以來の因襲によつて許可したに過ぎなかつた。こんな有樣で德川の世となり、明治の今日に至つて侮り難き勢を示して居るものであると云はれて居る。

▼娼妓が世の中に生ずるに至れる原因は、要するに男子の放肆と、女子の卑屈と相待つて一の惡現象を社會に生ぜしめ、之が中間に立つて利を圖る者が出來た事は否定されぬ。此の時迄は無論密娼であつたのが歲月は之を驅つて終に社會の表面に娼妓と云ふ一階級を生ぜしむるに至つたものである。

▼鎌倉氏時代には遊女の別當なるものがあつたと云ふが、江戶の遊廓は元和三年に始められたもので、その以前は密娼が各所に在り、江戶草創の際とて諸國の人が來集する繁昌の結果、爲政者が默過せしを幸ひとして他所にあつて醜業を營みしもの迄移り來り、又新たにも出て頗るこの輩が多くなつた。元和三年遊廓設置の公許も庄司某が慶長七年間に請願せるのを是認したに因るものであつた。當時德川氏は雄を天下に稱しては居たが、而かも能く之を保持するに足る制度と法令を定めて善良なる政を行はねばならぬ立場であつたれば、その施設には大に心を用ゐたに相違ない。江戶の風紀を健全にし、旗下の士の墮落腐敗を防ぎて剛健の氣象を養はしめて、一朝有事の際に備ふるの實力を蓄え、一方にはまた江戶を繁昌せしめて富と威とを蓄えて天下に覇たるものゝ居所たる體面を整えしめんとの事は焦心した處であつたらう。

▼處に持つて來て市中には淫賣婦が雜居して淫靡の風、妖冶の態を士人の目に觸れしむるが如きは、都會の腐敗を促がすの因である。つまり士民の淫を思ひ慾を發せしむる動機であつて士風民俗の頹廢、墮落を誘致するものである。之に對しては截然たる所置を採らねばならぬ事は具眼者の認むるに難からぬ

所であらう。

▼底で兎角の評はあつたれ、庄司某の請願を容れて遊廓を公許して左の五ヶ條の條目を下した。

第一條　傾城町の外傾城屋商賣致すべからず、並に傾城囲ひの外何方より雇ひ來り候共先々へ傾城遣はし候事向後一切停止さるべく候事。

第二條　傾城買ひ遊び候者は一日一夜の外長留まり致す間敷事。

第三條　傾城の衣類總縫金銀の摺箔等一切着させ申す間敷候、何地にても紺屋染を用ゐ申すべく候事。

第四條　傾城屋家作普請美麗に致すべからず、町役等は町々の格式通り急度相勤め申すべき事。

第五條　武士町人體の者に限らず、出所吟味致し不審に相見え候者は、奉行所へ訴へ出づべき事。

▼當時江戸市中に淫賣屋散在し居りて士民の間に往來せる事、恰かも今の藝者が市中の家に出入するが如く然も淫を賣つて居た事が知られる。

▼斯くの如くして新設する代りに、醜業婦を良民の間に雜居せしめる事や、往來する事を禁じ、都市の一隅に魔窟を存する代り市中の淫賣婦を驅逐して一人も存在せしめず、一隅に逐ひ込んで而して封印をした。當時新設許可の地は今の竈河岸附近で、今日では東京の中樞の地であるが當時はヨシが生えた沼同樣な處であつた事は其の名がヨシ原と云ふのでも知られる。右の次第で良民の間に雜居せし淫賣婦等も皆一隅に驅り込まれ群妖一掃の觀を呈した。

△遊廓の取締は斯くの如くした

▼吉原は斯くして出來た。庄司某は傾城町名主の役を仰せつかり、奉行より傾城町已に一個所下し置かれ候上は、江戸市中は申すに及ばず、端々邊鄙の地に至る迄遊女の類一切差し置き申す間敷候。若し左樣の儀有之候へば、傾城町名主並に傾城町の者共役目として屹度御訴え申し上ぐべしと嚴命を下された。遊廓外に賣淫窟があるのは遊廓の利を殺ぐもの

である。されば生存競爭の進運を應用して毒を以て毒を制する賢なる仕方を以てした。右の如くにして當時江戸市中の醜業者は悉く驅逐せられた。

▼此の外に徳川氏は尚一層の取締をなした。それは大門口制札なるものであつて、醫者の外何者によらず、乘物無用たるべし。附たり鎗長刀門内堅く停止たるべきもの也と云ふのを大門に建てた事である。

▼右は取りもなをさず社會の上流に位する武士たるものは、遊廓に入るべきものでないと云ふ事を指示せるものである。鎗長刀の如きものは皆武士の有する品位名譽權威等を表彰するものであれば、之を禁じたるは則ち此等の名譽を奪ふもので、名門華冑の出と雖も足一度遊廓内に入る時は田夫野人と擇む處なく、單に一色餓鬼として自己を認めねばならぬのである。

▼此の實際の訓戒は、墮落の極に到らざる世にして、自己を重んずる念大なる士人を警醒するには偉大の効があつた。社會の上流に位する武士が何とて此の辱めを受けて迄も醜窟に出入をしやう。慶長元和の頃には娼婦に狎れ親しんだ連中も、これ以來足を入るものが少くなつたと云ふ。尚此の上に内訓を以て嫖客の佩刀を妓樓又は茶屋に保管するを例として、宛然たる罪人遇らひをした。徳川氏が江戸の淸新健全を圖り、士人の墮落腐敗を防遏せん爲めには如何に意を用ゐたか、今日の爲政者等の考へも及ばぬ處である。

△其後の變遷

▼我邦の娼婦の沿革とも云ふべきを考ふるに、古より店賣り、町賣り共に行はれたもの丶如く、源平時代に白拍子等が將士の間に伍して田獵に隨ひし事なども物語りで見る處である。町賣りとは富豪の輩が自己の邸宅で奢侈を縱にするに當つて、往ひて戯れず、招ひて致さん事を欲する處から出來たものである。此の因襲を斷然打破したる徳川の爲政者は、偉ひ見識を有して居たと云はねばならぬ。

▼斯くの如く峻嚴なる取締をなしたれども、遊廓は相當に繁榮した、實に凄まじひ潜勢を有するに至つた。これを見るに政府が保護を與へなどしたならば、如何なる處迄發達するか知れたものでない。嚴にしても弊害は續出する、社會を混亂せんとするの狀を呈したから、幕府は寛永十七年夜間の營業を禁止して一撃を加えた。之は娼家にとりては甚大の打撃であつたに相違ない。確かに繁榮を減殺したが、其の結果として更に他の一方に意外なる現象が現はれた。それは所謂風呂屋者の跋扈である。

▼風呂屋者は時日を經るにつれ美人を集めて今日の待合茶屋の如きものとなつた。これが寛永の末から漸やく盛んになるに及んで、遊廓にも此の風が入りて風呂屋化せしめたと云へば、當時之が爲め打撃を受けた事も尠少ではなかつたであらう。明曆三年に取り潰しを命せられたるものが數百軒に及んだと云へば實數は倍以上であつたらう。

△明曆の大火、吉原に移轉

▼されば明曆三年遊廓移轉を命ずると共に、此の風呂屋をも取潰す事として遊廓が其の命に隨ふやうに取斗らつた。遊廓移轉の前に風呂屋取潰しの令は出さねばならなかつたか、朝令暮改は爲政者の最も戒めねばならぬ處で、威信に關する事大なれば此の期迄延ばして居たものと見える。

▼遊廓移轉の令が出たのに就ては、大驚慌が起つた。再三再四請願をやつたが聽許せぬ。此の時に當りて最も移轉に幸ひとなつたのは明曆三年の大火である。江戸にとりては大不幸であつたか、遊廓移轉を速かならしむるには無上の好機會であつた。それは元吉原も灰燼となつて一物も止めなかつた。底で石谷將監は移轉の命を下し娼家も之に從ふ事となつたこれが即ち此の間焼けた吉原の始めであつて、今度は明曆以降に於て移轉を命ずべき唯一の好機會で、吾人は今日一の石谷將監なきを悲しむものである。

史傳

米國奴隷解放者
ウイリアム、ロイド、ガリソン氏

松崎政次郎

(一) はしがき

多年の遺風として現今我國に行なはれて居る人身賣買類似の公娼制度を絶滅する目的を以て、今度廓清會が創立せられ、其機關として『廓清』誌の發行を見るに至つたのは洵に感謝に耐へない次第であります。

西暦千八百三十一年に北米ボストン市の下町の一家屋の陋室からして『解放』と名づけた週刊紙が生れ出で、即時奴隷の解放と云ふ事を絶叫し、奴隷制度を目して大罪惡であるといふ事を國民に警告しましてより實に三十四年間の久しき、幾多の迫害と苦難とを忍び、不撓不屈終始一貫した其精神は、遂に二百有餘年來亞米利加に傳はつて居た此惡制度を破壞したのであります。實に此事實に鑑みても吾が『廓清』誌の使命の重且つ大なる事を感じ、其輝ける前途の希望に對しても深く祝せざるを得ないのであります。

同じ人類として生を此世に受けた幾多の婦女子が誤解されたる道徳の觀念と、因襲の久しき世の罪惡とに誘引せられ、不憫なる境遇に囚はれの身となつて居る彼等を見て、何等同情の念も起さず、此制度の存在に就ても、まるで對岸の火災程の感じもなくて、默過して居たとすれば、之に依つて受く可き罰と汚辱とは、吾國民一般に及ぼされると云ふ事を覺悟しなければなりません。

思ふに、他日此公娼制度が全廢された曉に、我々の子孫が現今の有樣を顧みたならば、恰かも今日の亞米利加人が僅々五十年前迄奴隷制度が存在して居た事實に對して、呆然として驚き且つ悔むと同じく必ず斯かる人道を踏み違へたる野蠻なる制度が近來迄も存在して居たのであるか、と思ふ期が來るのでありませう。

今日の如く人文の進歩發達したる時代、殊に世界文明の一等國として、極東の君子國として誇りつゝある我國に於て、此の如き野蠻なる公娼制度が公認されて居ると云ふ事は、實に面目次第も無い事でありまして、又實に廿世紀の人道を汚す者と謂はねばなりません。然るに、今や此廓淸會の一團が起つて正義と博愛の旗を飜し、人道のため飽迄此罪惡と奮闘しようとするは實に喜びに堪えないのでありますが、其に就ても、此際我々の摸範と成す可きは米國の奴隷解放論者でありまして吾々は須らく其確乎不拔の精神と其熱誠なる精力に學ばねばなりません。

(二) 奴隷解放とリンコルン

米國の奴隷廢止に與かつて、千古不滅の榮へを遺して居るのはリンコルン氏であります。彼が大統領在職中に於て彼の有名なる南北戰爭が起つて、其戰爭の結果が因襲の久しき奴隷制度を破壞するのに最も好き機會を與へたのみならず、大に此前途に向つて力を注がんとして居る時に當つて、一刺客の爲めに倒れたのであるから、彼の一生が奴隷解放の事業に捧げられたやうに思はれて居りますが、併し奴隷解放の首唱者は彼にあらずして他にありました。實を曰へばリンコルンは曾つて奴隷廢止を首唱した一人でもなく又アボリショニスト團の一員でもなかつたのでありますが彼が共和黨から推されて大統領候補となつた時、恰も奴隷問題が熾んになつて來たので、共和黨は其新開地に奴隷制度が伸長するのを禁止すると云ふ事を以て、黨の綱領とし民主黨と競爭して遂にリンコルンが當選の榮を擔つたのであるの

です。然るに民主黨の根據地たる南部の諸州では共和黨の政府に服從せず、別に大統領を選出して政府をつくらんと分離したのが南北戰爭の原因となつたのであります。

（三）初代の奴隷開放論者

亞米利加の奴隷制度を目して人道に悖戻するものとなしたる人は少なく無いのでありまして、最初の大統領であつた華盛頓、及び三代目のジェファソン氏などは其重立つた人で、其外亞米利加で三大政治家の一人と呼ばれたクレー氏の如きは、奴隷使役の慣習が不正の極である事を自覺して、漸次其廢止を唱へ解放された黒人の爲め亞弗利加に殖民地を購求して、順々に彼等を送致するの意見を建て、其實行の主旨より成つた亞弗利加殖民協會の創立者と迄なつたのであります。

ランデーと云ふ人はクレー氏よりも尚一層熱心なる奴隷廢止の主張者であつて、ボルトモーア市で毎月一回『奴隷解放』に關する記事を出版し、憐む可き黒人の同情者となり、味方となつて一生を捧げたのであります。而して此人の熱烈なる精神が此問題のために一人の青年を奮起せしめたのでありますが此青年こそ實に四百萬の黒人を、其壓迫の中より救ひ出すに至つたウイリアム、ロイド、ギャリソン其人であります。

（四）ギャリソンの生立

青年ギャリソン氏は千八百〇五年北米マサチユウセット州の北岸にあるニユーベリーホートと云ふ小さき船着きの町に呱々の產聲を上たのであります。父は海員であつて一船の長として船長の職を採つて居ましたが、不幸にも彼が東西も辨へぬ幼少の折に家を出て即ち行衛不明となつた爲め、後に殘された母及び兄弟は忽ち衣食の道に困り、母は或家の褓母に雇はれ彼自身は靴製造所の見習ひとして其家に送られるといふやうに落魄致しました。然るに彼は靴

職工として長く其家に在る事を得ずして逃げ出し、次に家具製造所の見習職工として雇入られたけれども又其位置を保つ事が出來ず三度目で新聞活版所の見習となり、玆に初めて彼が天性に適應した職業を得て後は、其仕事に勵精したのみならず、幸に勉學の機會を與へられた爲め、普通教育をも修得する事が出來、此の如くして年齡十七歲の時既に主人主幹の新紙に投書する迄に成つたのであります。かくて彼が十八歲の時に其の慈母は貧窮と勞苦の裡に此世を去りました。之は彼に取つては實に千歲の遺憾でありました。

此母親は、浸禮教會に屬した熱心なる基督教信者で、非常に博愛の念に富んだ婦人でありまして、其息たるギャリソンが斯かる偉大なる人物となつたのも此圓滿なる婦德を有して居つた母親其人の感化に因ると云はれて居ります。

(五) 獨立の新聞紙を發行す

偖、彼が廿一歲の時は既に獨立して一新聞紙を主宰するに至つたのであります。然るに彼の生地たるニューベリーポートは寒村の僻地で、將來の大希望を充たすことは餘りに不適當であるが爲め、廿二歲の時にボストン市に出て其當時マーレーと云ふ人が酒の人類に及ぼす害毒の甚だ大なる事を說き、人民に禁酒の必要を勸告し『博愛』と名づけた新紙を發行し、酒類製賣廢止を主張して居た牧師の家庭に寄寓して、其記事を助ける事となりました。恰度其時にボルトモーアー市に於て「ヂニアス、オフ、ユニヴアーサル、エマンシペーション」と名づくる月刊紙を發行して、奴隷解放の爲めに全力を集注して居りました。而してランデー氏が江湖の同情者及び購讀者を求めん爲めに、ボストン市に來つて、先づマーレー氏を訪問した其時始めてガリソン氏はランデー氏と相識の機會を與へられ、相互に熱誠なる奴隷解放說を唱へ、大に感動し、一身を捧げて憐む可き黑人の爲に盡す事を誓つたのであります。

（六）即時解放論及入牢

其後彼はボルトモアー市に行つて、ランデーの發行紙を助け、今迄は毎月一回の發行であつたのを週刊として大に擴張し充實させんと努めて居のにも拘らず、茲に兩者間に意見の衝突を惹起した爲め、遂に一致の行動を採る事が出來なくなりました。然し双方協議の上、各自の意見を個々別々に掲載する事となつて、落着が付いたのでありましたが、蓋しランデーは最初から順序を經て漸次に奴隷解放の實を揚げようといふ考へであつたけれども、ギャリソンはそれを以て博愛主義に悖るとなし、奴隷使役と云ふ事が最も大罪惡の一つである事を自覺した以上は即刻起つて全亞米利加人に警告し、今迄の罪を改悔せしめ、正道を踏み違へて尙進みつゝある人々を正道に復歸せしめねばならぬといふ、所謂即刻奴隷解放主義の先導者でありました。而して解放せられた黒人は其儘に米土に居住せしめ、白色人種の得て居る凡ての權利を與へ、自由を得せしめて公平なる待遇をなすべきであると唱へたのであります。之に依つて民心の反響は、購讀者の減少となつて來た爲めに其新紙は一大打擊を蒙りました。

今一つ吾人が記憶す可きことは、元來ボルトモアー市は奴隷賣買の市場でありまして、或日此地方に居た八十人の黒人を船に乘せ、南部ニウヲーレンス市へ輸送せんとした事がありましたが、其時彼は之れに關係して居る徒黨の非道を痛快なる言論を以て責め、其仕事は恰も往時亞弗利加から土人を掠奪し來つて、亞米利加人へ賣却した海賊の所業と同一であると激しく彼等を攻擊した爲めに、名譽毀損を以て告訴され、遂に有罪の判決を受け、發行紙は停止せられ、身は鐵窓に投せらるゝに至りました。然るに紐育市の商人でタフインと云ふ仁愛深き有志の爲めに、深き同情を寄せられ、罰金を償つて彼は入獄以來四十九日目に不拔の意氣を展す可く自由の身と成る事が出來たのであります。（未完）

社會及家庭

廓清時言

球川

●十月號の三田文學は小説飈風を登載した故を以て發賣禁止を命ぜられた。

それに就て、古賀警保局長は『飈風は淫猥極まる卑俗極まつたもので、實に怪しからぬ。私は文學を尊重する事は知つて居るが、こんな淫靡なものを社會に出すことは、絕對にさせない。此小説などは春畫よりも猛烈だ、文字となつて人の感情をそゝるから、春畫以上に害毒を流す。今後と云へども、かゝる奇怪な出版物は、嚴重に發賣を禁止する考へだと言つて居る。

さういふ小説の內容は何かと讀んで見ると、ある青年畫家が吉原に遊んで遊女に戀し、他の女に肌を許さぬと誓つて東北の旅に出で、途中遊廓に遊んでも女が側へ來るのを恐れて飛び出し、諸國を廻つて常陸の宿屋で根太が出來て步けなくなり、女中に潰して貰つて歸京し、六ヶ月ぶりに吉原に行つて戀人に逢つたが、翌朝其側で冷たくなつて死んで居たといふ筋である。

●吾々は此小説に對する當局者の處置に就て敢て異議をさしはさむ者でない。たゞ腑に落ち兼ねるのはもし此小説が局長の所謂「怪しからぬもの」とすれば此小説に書かれたる事實は更に「怪しからぬもの」でなくてはならぬ。文章は影である、事實は形である。影にして罰すべくんば、況んや其事實に於てをやだ。然らば則ち影をさへ罰するの必要を認むる當局者は、當に其實物を採へて之を罰すべき筈ではあるまいか。

●然るに不思議なる哉小説飈風の如きは政府が公許

せる遊廓に於ての日常の茶飯事だ。そうして遊廓の營業者は東京市の良民を代表して區會議員ともなり兒童敎育の任に當る區の學務委員ともなり、日本第二の大都會大阪市に於ては堂々たる代議士とすらもなつて居たのである。

若しも大泥棒が隱れて居りますと報告して吳れた人があつたならば、當局者は大に之を喜び感謝して直ちに警察官を差向けて其泥棒を取押へるであらう。而して其密告者には賞を與ふるであらう。若し然らずして犯罪人には手も付けず只其密告者を捕へて之を處分するものがあつたならばそれこそ「怪しからぬ話」ではあるまいか。文學は或意味に於て社會に對する人民の「報告」である。

◉臺灣の生蕃の間には內地人の首を獲ると、直ぐ樣自分の蕃社に持つて歸つて、社中の者全部を一つ處に集め、首祭りといふ祝ひの踊りをやつた後で、首の切り口の處へ大きな盃を受け、別に生首の口から酒を注ぎ込んで、盃の中へ滴らせ、其血だらけの酒を一口づゝ啜り合つて、再び首祭りの踊りをするといふことである。是は慘虐極まる蠻風である。然し乍ら敵の首に對する蠻民の態度なら尙恕すべし、娼妓といふ同胞の生血を吸物にして啜つて私腹を肥して居る樓主の慘虐に至つては恕すべからずではないか。

◉榊醫學博士の說に依ると、凡ての不道德漢は皆精神病者か、或は精神病的人物であるといふ。飲酒家すらもアルコール中毒に依つて、大腦の神經細胞を犯された一種の精神病者だといつて居る。此議論で行けば、妻を持ちながら道樂をする男子は勿論、未婚の男子の不義の快樂、皆悉く精神病者に違ひない。それなら遊廓は精神病院であらうか。

◉支那では婦人の幽閉的生活を打破す可き運動を開始する爲めに此程上海に於て「支那國民婦人協會」といふのが設立せられたそうだ。支那婦人の幽閉的生活はさる事ながら、娼妓の拘禁的生活は一層の熱心なる運動を要する事ではあるまいか。

◉支那人は今日でも倘盛んに奴隷に賣られて居る。奴隷賣買の本部は英領シンガポールにある、そして重に支部を香港や厦門に設けて、盛んに貧民の壯丁を買ひ出して來る。其價格は一人拾圓拾五圓乃至貳拾圓位であつて、貳拾圓より高いのは買はない。之を澤山買ひ出して來て一船五六百多きは千人以上積み出す、毎年春季に南方で此奴隷運送船が盛に出る。新嘉坡の本部では之を受け取るや否や近傍の開墾者や、礦山主へ供給し一定の賃金を定めるが、其賃金は大部分本部へ卷き上げて、殆んど一錢も本人に與へない。奴隷は此境涯に入ると忽ち妓樓に出入し、賭博を覺へ、亞片を喫し、其金は又悉く本部から借り、拾圓借りたものは忽ち百圓にもなるので、一生其苦境を脱却することは出來ない。英國及び清國の官憲は、共に此事實に對して知らぬ顔をして居る。とは驚くべき事實として某新聞及某雜誌に報道せられた記事である。然し乍ら支那は日本人が常に、衰亡に瀕しつゝある國として輕蔑して居る國民だ。そんな國民の間には此位の事はあらうぢやないか。何となれば一等國を以て誇りつゝある日本國にすら此以上の慘酷なる奴隷賣買が行はれて居る故に。讀者若し其實例を聞かんことを欲せば、余は其幾百の實例を語るであらう。

◉某當局者の話しによると我が國に於ける犯罪は、男子よりも女子の方が遙かに多い。男は艱難に遭遇すると、著しく奮鬪心を起す者と、犯罪者となるものとの二つある。然し女にありては、悉く墮落するものと、定まつて居るといふ。生理上誘惑に負け易い、弱點を有して居る、婦人のためには、男子よりも特に之を保護して其弱點を補ふように社會組織を改善するのこそ肝要である。然るに其弱點を補はんとせざるのみか、却つて大きな陷穽を設けて、(遊廓と名づくる)其墮落し來らん事を待ちつゝあるような政策は、實に婦人に對し慘酷なものと謂はねばならぬ。

公娼廢止意見

東京帝國大學教授醫學博士　片山國嘉

衛生上から云へば公娼と云ふことも淫賣と云ふことも同じであつて、淫賣と云ふ事實には花柳病の傳染と云ふことが伴ふのであるから之から豫防の方法を講ずると云ふことが必要である。今更云ふ迄もなく肺結核、酒精中毒及び此の花柳病は社會の三大病であつて社會人生に非常な慘毒を及ぼすものであるから之れが豫防を爲すと云ふことは最も必要である。茲に於て淫賣には出來得る方法を以て檢黴を勵行せなければならぬ。人道的見地から社會の風敎護持の爲めに公娼の是非を論ずるものも無論社會保護の爲めである。衛生上の立場から淫賣の事實を認め病毒豫防の必要を叫ぶのも亦た社會保護の爲めである。いづれも社會保護の爲めであるから、互にさう隔絶すべきものでない、又た互に矛盾してはならぬ、理想は同じ所になければならぬ。ツマり人道の理想と現實の衛生條件とが能く調和して行くと云ふことが最も必要なのである。能く迄も此の問題は事實の上の問題であるからして理想にばかり走つてはならぬ。事實を事實として研究し、道德上の目的と衛生上の目的とを一致せしむる樣に努めればならぬ。要するに人道と衛生とが協力して其の一致を擧げればならぬ。

▲此の見地から我邦の公娼制度を見るに、公娼と云ふ字に力を入れ過ぎて居つて、餘まりおツ開らき過ぎては居らないかと思ふ。衛生上の要求からして檢黴を行ふと云ふ必要上、公けに淫賣行爲を認め之れを取締つて居るのではあるが、餘りにおツ開き過ぎて居る結果、彼等醜業者が普通の正業者と共に肩を並べ、大厦高樓を擁へ、公々然社會に跋扈して居るのは、假りに衛生の條件を滿たし得たとしても社會の風敎に害毒を與ふることが甚しく、人道上忍ぶべからざるものがあつて非難の種子となる。之れは餘り公けに認め過ぎて居る結果であつて、暗黑面の事は、暗黑面に相應した認め方もあり取扱方もある筈なるに、餘り無頓着におツ開き過ぎては今日の弊あるを免れない。行政の上に起つ人はどうしても法律に力を入れ過ぎて、公娼と云ふ上は飽くまでも公けに認めればならぬと云ふ風に見て、所謂手加減とか斟酌をして取扱ふと云ふ用意が缺け易いやうである。法律を扱ふ人には此の傾向があるのを免れないやうである。吾々の望む所では行政官は醜業婦に對して檢黴を行ひ衛生の要件を滿たし得る程度に於て公けに認められんことを希望する。更らに一歩を進めて云はゞ、彼等をして堂々と振舞はしめないで成るべく內證で公けに認むると云ふ風であり度い。內證で公けに認むる抔と云ふと言葉の矛盾のやうであるが、法律に拘はらないで、曩きに云つた人道上からの社會保護及び衛生上からの社會保護の精神を實現しやうと思つたならば左程困難な事で無からうと思ふ。ツマり風敎上の理想をも達し又た衛生上の目的をも達せんが爲めには風敎、衛生及び取締の此の三つの者が協心戮力して互に聯合をとり調和を圖つて行かねばならない。

▲斯く考へ來ると云ふと、吾人には公娼とか私娼とか云ふ公私の文字は左程必要條件ではない。然るに今日多くの議論は公とか私とか云ふ文字の議論であつて、其れで行止つて居るやうに思はれる。只今の問題は公娼がどう

とか私娼がどうとかと云ふのでなくて、如何にせば風敎を維持し衞生の要求をも達し得べきかと云ふのにあるのである。即ち內容の問題である、實際の問題である、だから公私の文字の議論は此處で避けねばならぬ。無論所謂公娼として內證で公けに淫賣を認めると云ふよりも、私娼として內證で公けに取締りをするといふ方が善からうと思ふけれども、事情がこれを許さなかつたならば今日の公娼の名でもよろしい。只其の內容に實あらしむると云ふことが緊急問題である。

▲吾人の意見を今少しく具體的に云ふならば、第一、所謂妓樓なるものに對して今日のやうな大厦高樓を建てしめないやうにし度い、幸にして吉原の遊廓が燒けたが、吉原の全燒は吾々から云ふと不幸にあらず幸であると思ふ。燒けない以前上野公園から淺草を臨むと目に入るものは本願寺、十二階及び吉原の大厦高樓であつた、外國の觀光客にアレは何の建物かと聞かれても本願寺と十二階とは說明が出來るけれども遊廓に就ては說明を憚らざるを得ない。婦人の客に對しては殊にそうである。又た池の端に櫛比せる待合なるものは、誰れでも目が附き大繁なものは淫賣の場所であることが分かる。其の他品川でも新宿でも千住でも、人目に立つ大建築が並んで居つて儼然たる一廓を爲して居る。此等は都市の體面から云つても風敎上から云つても實に忍ぶことが出來ぬ。暗黑面の醜物は飽くまで暗黑面に置くべきであつて、公々然堂々と甍を並べて居るのは怪しからぬことである。畢竟に其筋の取締が餘りおッ開らき過ぎて居ると云つたのは此の一事でも證明して居る。宜しく此等の醜業窟は普通の往來から人目に立たない裏路次の樣な所へ設け、此へ用事のある者の外は其の存在を知らないやうにし、又た建築は斷じて大厦高樓を許さないことにし、普通の民家よりも低くするやうにし度い。それから其の位置とか家數とか云ふものは、或る程度迄は其の必要に任かせ、强ゐて一所へ纒めると云ふやうな事をしないで、各所に散在せしめ、而もが其の周圍には煉瓦か何かで一區劃を設け、良民の住宅と隔離せしめ、此の中をも賣淫區域として此より以外に於て淫賣を爲すものあれば此處へ連れ來ると云ふやうにし、檢黴を勵行するやうにしたならば、風敎を傷くることも少なく且つ衞生の目的をも達することが出來やうと思ふ。それから又た其處では客に酒を一切賣らないことにし、酒を助くる機關を凡べて置かないことにする。從來の妓樓なるものは酒食、幇間、藝妓の出入、總花を切るとか何んとか云ふやうな事があつて、淫賣以外に誘惑の機關が至れり盡せりで、此の爲めに遂に誘惑の虜となり良心を痲痺し、さては流連、さては不義の借金に苦み、諸有る不道德の行爲が起るのである。若し此等の誘惑機關を悉く撤去し、只賣淫だけならば墮落の深淵に陷るやうな事が少からう。生理的から云ふと性慾と云ふものは止むを得ないものであつて、無理にこれを抑制禁慾する時は、却つて他の弊害を來たすものであるから、各人が悉く聖人君子で非らざる限りは絕對にこれを禁ずることは出來るものでない。不道德に導いたり、社會の衞生に危害を及ぼしたりしない限りに於て、今云つたやうな取締りの下に賣淫の設備があつても差支が無からうと思ふ。但し斯かる所に誘惑の設備を爲すと云ふことは斷じて止めればならぬ。吉原に於て景氣を添ふる爲めだと云つて春になると櫻の植込をなすと云ふやうなことは誘惑の大なるもので、然んな事は絕對に禁ぜねばならぬ、要するに賣淫のことたる闇とより暗黑面のことであるから成るべく明るみへ持出さないやうにして而も衞生上の要件を滿たす事最も必要だと思ふ。(救濟)

結婚と離婚

敎育家　安部磯雄

或る西洋人の言葉に「戀愛なくして結婚は出來ない。併し戀愛のみの結婚も大なる誤りである」さいふことがあるが、結婚に就て自分の考へもよく、此言葉に言ひ現されて居る。戀愛なくして或は戀愛のみにて成立つた夫婦關係が、日を經るに從ひ、互に不滿足を生じ、不愉快なる生涯を送るの例は、我々が日常眼にし耳に聞く所である。之を具體的にいつて見れば、妻は自分の朝夕の用事をして貰ふのである、自分の家の始末をして貰ふのである、妻は宜しく家を治め得る程度の資格さへあれば澤山である。容貌は固よりその見識、その趣味如何は問ふ處でない。要は只家政の上手下手にある、もし容貌に不滿足なれば妾を置く事も出來るし、面白く遊ぶには料理屋さいふものあるなごさ、日本には斯かる考を持つて、結婚する男子がまだ少なくないさ思ふ。資產家殊に田舍に於ける金持なごには結婚に就ての煩累が夥しい、親戚から娶られねばならぬさか、財產さか家柄が何ださか、中々本人の戀愛を滿足せしむるに足る結婚を行ふこさは困難である。斯かる場合仲人の曰く、『兎に角彼女を貰つて置きなさい、其内には又ごうにかなるであろう』さ斯くて少しの愛情もなくして、夫さなり父さなるのである。一方婦人の方でも戀愛なくしての結婚が、將來益々盛んに行はれる傾きがある、之は婦人が己れの虛榮心を滿たさん爲め、男子の位置財產等にのみ重きを置き、夫たる人が果して自分の熱愛を捧げ得るに足る人格であるや否やに思ひ及ばない、人物さしては兎角の評あるに拘らず、容貌にも多少の不滿を忍んで、尙ほ富貴權門に嫁し度いさ望むからである。かゝる成立ちの結婚が、夫婦の愛情を續けて行く事の出來ないのは當然の事である。

牧師夫人　小崎千代子

併し結婚さ云ふ事は、唯樂しい家庭を作るばかりが目的ではありません。旣に家庭さいへば老人もあり子供もあり、また追々は孫もあり結局は子孫もあるさいふのでありまして、單に夫婦が仲よく暮らすばかりが能では御座いません。また假りに夫婦の和樂さ云ふことからのみ見ても、かゝる夫婦生活は永續しにくいもので、結婚當座の半年か一年の間こそそれで滿足は出來ますものゝ、段々年を經て家庭が複雜になるさ共に、漸くかゝる生活に飽いて何か物足らぬ寂しみを感ずるもので御座います。其邊から見れば、かゝる夫婦は必ずしも美はしい理想的の夫婦さは云へないので御座います、私は嫁入の娘さん方に、かゝる夫婦生活を夢想する事の間違つて居る事、そうして斯る和樂よりも更に高尙な樂しい夫婦生活のあることをお話致度いのです。

敎育家　山脇房子

昔は隨分綿帽子を取つた處で初めて、オヤ〳〵自分の妻になるところの女はこう云う奴であつたか、自分の夫になる人はあの人であつたのか、さ思ふ樣な婚禮も多かつたさ云ふ事ですが。兎にも角にも此節ではお互に其性質の大体位は聞き知つて、それならば、さいふ事で結婚をするのですから、治まつて行そうで御坐いますのに、割合に面白くない夫婦はなか〳〵多いやうで御座います。お互に性質を聞き知るどころでなく、當人同志が知り合つて結婚した人にも隨分直に種々の事を云

つて溢して居る方が御座います。それに就て思ひますのに、男も女もお互に樣々の缺點を持つて居る同士の寄り合ひですから、どんな夫婦でも互に何程づゝかの辛抱をし合はなければ、圓滿に暮らして行く事は出來ないものだらうと存じます。今の夫婦間に問題の多いのは、男にも女にも辛抱が足らないからではありますまいか。

今少し一旦夫と呼び妻と呼ばれた以上は、離る可からざるものであるとして、容易に落膽もせず不滿をも抱かずに、辛抱に辛抱を重ねて自分も進歩し、他をも進歩させたいといふ氣で努力いたしましたなら、稀にある少數の場合は別として、大抵は樂しんで暮らすことの出來るものだらうと存じます。

僧侶　大內青巒氏

離婚といふ事はつまり婦人の修養の足らぬ處から持上るので、眞に修養ある婦人であつたならば、決してかう云ふ問題を惹起す筈がない。一體妻は夫の看護婦のやうなもので、受持患者の病苦を憫み專心介抱するのが、看護婦の務めであるのに、あの病人は私の思ふ通りにならぬ、と云つて怨み歎くならば、餘程可怪なものである。良人の虐待を怨み歎(かこ)つのもこれと同じ譯で、つまり良人が自分の思ふ通にならぬといふ不平があるからである。不德な夫は恰も魂が病氣に掛つたようなもので一種の病人といつてよい、病人に對して看護婦たる細君が、怨んだり歎つたりする謂れはない、どこ迄も其病人を憫む心を持て之に對する覺悟がなければならぬ。

既に夫に對して怨んだり歎つたりするのが、間異(まちがい)である以上は、さういふ夫人から離緣しようとするには、尙更戒めればならぬ。

良人に對して怨みがあつたり、不平があつたりするのは、その愛憐の情が足らぬからである。この情は人間道德の最上のもので、眞に高い德を有つて居る人は、こんな時に慈悲を行はずに居られぬのである。如何なる相手に對しても看護婦が病人に盡すような、天職を盡さずには居られないのである。

牧師　綱島佳吉氏

兎に角夫婦喧嘩といふものは、世間にあり勝のものであるが、喧嘩をしたら何時でも妻君に出て行けと云ふ人がある。その癖心底から離緣をしようと思ふので無くて、只行き掛と上調子に乘つてこんな事をいふのである。然し女に取つてはこれ程辛い言葉はない、女は氣の狹いものであるから、ほんの行がかり上の言葉だと思はず、どうしても自分が嫌はれたのだと一圖に思ひ詰めをするのだ。

實際又婦人に取つては離緣される程辛い悲しい事はない、何が苦痛だと云つてこれ程の苦痛はない、一旦嫁いで行つた以上は、歸る事を許さぬ親もある。かういう婦人に向つて出て行けといふのは少し酷過ぎるやうである。然し婦人の方にも多少の罪を免かれぬ。

中には「出て行け」といはれたからといつて『はいそんなら出て參ります』といつてどん〳〵出て行つてしまふ人もある。

始めに本心から出て行けと云つたのではなくても、かうなると男の意地眞から怒つて仕舞ふやうになる。かう云ふ行違ひから遂に離緣沙汰になつてしまふのが世間に往々ある。男の方から出て行けと云ふのは無論惡いが、女の方で出て行くのも惡い。

難つかしい離婚問題も割つて見ると、案外一寸した事から起るのが多い、數萬戸を燒き拂ふ大火も、其元は燐寸一本から起る、いよ〳〵燃え擴がつて來ると、中々一つや二つの蒸氣ポンプ位では消し止められないが、燐寸一本の時には一滴の水でも容易に消し止められるのである。（婦女界）

満韓に於ける慘憺たる醜業婦

大連慈恵病院
事務理事　柴田博陽

記者足下

満韓に於ける吾が醜業婦が、如何に跋扈跳梁を逞うしつゝあるかは、既に何人も承知せる處なるべけれども、而も裏面に於ける彼等の慘憺たる生活を知悉せるものは、蓋し尠かるべきかと存候。

予は所用を以て大連より上京の途次、滿洲の奥地を經て安奉線により、朝鮮を通過し來りたるが、幾度か彼等の悲慘なる實狀を目撃し、痛憤慨歎の餘茲に船中より筆を走らせ居候。

満韓の地を視察せし者は、京城の新町と大連の逢坂町を瞥見し、其土地不相應に遊廓の殷盛なるを怪しむと共に、其建築物の雄大なると完備せるとに一驚を吃する事と存候。實際の處、日本の經營する事業中寧ろ他の幾多の正業者よりも、遙に彼等醜業者は偉大なる勢力を有し居る者に候。

予は本邦人の經營する遊廓なるものが、如斯大勢力を有せるを視て、喜ぶ可きか悲しむべきか云ふ處を知らず候。乍去、予は朝鮮人や支那人中の苦力なる一階級を見たる日本人が、一び口を開けば即ち彼等は劣等人種也野蠻人種也と、必ず冷評嘲罵の言を發せずんば止まざる事を知る者に候。而して其劣等視し野蠻視する朝鮮人支那人中に、春を賣り若くば之を賣らしめて不義の私腹を肥さんとするもの丶寥々たるを見る時は果して如何の感か有之候や。

記者足下

大連には三萬人の日本人と五萬人の支那人とが居住致居候。而も三萬人の本邦人中に賣淫婦一千人、

(三十に對する一の割合)醜業者四五百人有之、五萬

●人の支那人中には百名（五百に對する一の割合）內外の賣淫婦と五六十名の醜業者に過ぎざる事を忘るべからず候。今此點より兩者を比較して果して日本人は支那人に優れりと言ひ得可く候や。人倫道德の大本たる貞操を賣買する、此忌むべく憎む可き、士君子の口にするをだに耻づる醜業汚行は、あはれ何事ぞ劣等也野蠻也とする淸人の二十倍に相當する數を示せるは、眞に慚愧に堪えざる處に候はずや。

更に之を京城に見るに、同地には新町と云ふ堂々たる遊廓あれども、朝鮮人側には如斯ものは之あらず、强いて求むれば所謂妓生と稱する一團の婦人あれども、彼等は公然の賣淫婦にあらず候。

記者足下

大連京城の如きは兎も角も多少の土人醜業者ありと雖、進んで滿洲の奥地若くば朝鮮の平安北道地方に行かむか、土人醜業者の隻影だも之あらずして、獨り我同胞姉妹たる醜業婦の跳梁を恣にせるを見るべく候。斯くても尙、朝鮮人や淸國人に對して劣



東京市麻布區廣尾町なる救世軍婦人ホーム

等呼はりをする權利ありとする乎。

而も滿洲の奥地、乃至平安北道に於ける我醜業婦は、豚小屋と擇び難き陋屋の中に日本人が見て以て劣等人と稱する、惡臭紛々蓬髮弊衣、汚垢三寸の醜穢極りなき苦力輩を唯一の華客として、春を鬻ぎ肉を賣りつゝあるに非ずや。

啻にそれのみかは、彼等は何時の間にやら阿片を喫ふ事を覺え、之を以て客を呼ぶ手段とさへしつゝあり、あはれ其結果や如何に、一度紅粉を剝ぎ來らば、憔悴せる顏の眞に形容枯槁此世の人とだも思はれざる有樣に候ぞ。事茲に至りては豈啻に恥辱の云爲に止まらんや、寔に默過すべからざる一大人道問題に候はずや。

記者足下予は親しく彼等の慘憺たる實狀を視、轉た、惻隱の情に堪えず、切々として腸の九回するを覺え候。生き乍ら焦熱地獄に投せられたる彼等は、自らさまで之を苦痛とせざるべきか。否、否、彼等は懊惱苦悶しつゝ、寧ろ死の到らむ日を待ちつゝある者に候。暮れ行く秋の夕、泣くが如く訴ふるが如き彼等の歌ふ所を聞け。

　　月の出る方を東と定め、
　　　故郷はそちかと袖に露。

何ぞ其聲の悲愴にして其調の悽慘なるや。

記者足下、彼等の內には虛榮に囚はれて自ら悲境に沈淪せる者も之あらむ、されど多くは惡魔の毒手に誘拐せられ、其半生を咀ひ殺さるゝ者に候。あはれ己が不義の貪婪の犧牲として、無垢の處女を燒き殺さむとする憎みても尙餘りある醜業者を、我日本國政府は營業稅を徵して、其營業を保障するに至りては、所謂泥棒の上前を跳ねるに等しく、更に更に憎むべきものには非るかと存候。

されど之等は畢竟其實狀を詳にせざるに起因すべく、幸に廓淸會の成立を見、之が解決の爲に奮鬪せらるゝは、予等の如く、慘狀を極めつゝある海外醜業婦の內狀を熟知せるもの、殊に痛切に感謝する處に御座候。草々敬具。

視察

藝娼妓口入所視察記

婦人記者

世は初秋の肌うすら寒く、何となく哀れ催す夕方の町。軒には電燈瓦斯燈光りを散ち、打水清げに盛り鹽に縁喜を見せて居る待合、或は料理店の板壁洩れ來る女の笑ひ聲、三味線の音。一刻千金の花柳の巷に、リン〳〵と鈴の音のみ音もなきゴム輪の車、帽子眉深な紳士。今晩はありーと左褄の仇者の出入する町を通り過て、横町の雇人口入所と看板の出て居る家の外に足を留めて、内を窺つて見るに、別に人の來て居る樣子でもないので、御免下さい。と戸を開けると。いらつしやいと二三人の聲が一所になつて御上んなさい、とあいそよく迎へて呉れる。

* * *

入口が土間で其上が八疊ばかし。奥が二間程あつて一つの方には子供が寢せてある。

片隅には帳場格子が置かれて、机の上には日本綴の帳面が幾册となく積まれてある。用箪笥を後ろにして此家の主人頭の少しはげかゝつた、赤ら顔の小肥りのした中脊丈の五十位の男が煙草盆を前に置て坐つて居る。

天井一ぱいもありそうな熊手がある一方の神棚には燈明あか〳〵として。招き猫や狐の像迄が並べられてあつて、何處となく千客萬來といつた樣な樣子が見へる。

奥には拭き込んだ大きな長火鉢を据へて、此人の女房であろう眉のない色の白い、粋な櫛卷の女が衿のかゝつた着物を着て、何か縫針をして居る。其右手には口八釜しげな主人の母であろう黒油でかため上た、小さな丸髷にいやに拔衣紋をして、絹の前掛をしめた目の底光りのする六十路ばかりの老媼が長煙管ですぱり〳〵とやつて居る。私が入つて行くと婆さんは座布團を出したり何かしてなか〳〵お世辭がよい。

主人と向ひ合つて、何か話して居るのは丸顔の十八九の娘で、廂髪に巾の廣いリボンをかけて、白衿に紡績絣の矢がすりといつた樣子は、堅い内の女學校通ひの令孃としか見へぬ。然も其口を利く態度は、世馴れたもので今其彼等の口吻をまれて見ると。

（婆）、あのれ先刻の御話しのところへ連れて行ていたゞこうと思つて來たのよ伯父さん……。

（主）、だつてお前さん其頭じや駄目だあれ。日本髮にしてと粹のかゝつたのを着て行かなくちや。とてもまるつきりの素人だと思つちまつちやものになりませんよ。お前さんもそれ位な氣は付きそうなものだ。……

（娘）、でもれ今迄のところは西洋料理でしよう、だから成る可くハイカラにしろつてんですもの。……

（主）、西洋料理はそれでもいゝが、待合はいけないよ。だから明日髮もかへて半衿なんぞも氣を利かしてさ。其積りにして晝間來なさいよ何しろ目見へだから晝の方が都合がいゝや。

（娘）、それじや明日にしますわ。今少し早く其事を聞て居たらよかつたものだ。……と口の内でぶつ〳〵小言を云ひながら擧だけはいさましげに、左樣なら……と出て行つた。私は此對話を何氣なく聞て居て自分が十九位の時にはほんの子供上りで人の前で話しなんぞは勿論たゞだまつて居たものだ。此頃の娘で進んで待合奉公でもしようといふ人はちがつたものだと寒心にたへぬ。

老婆は新らしく茶を入れて進める。

主人は何て間の拔けた奴だろう。忌々しいとつぶやいてれへお前さん考へても分りそうじやありませんか。あんな奴は田舍の酌婦にでも成つた方が身柄相當だ……「私は酌婦になればどの位ひお金が取れますかと聞ふた。主人はそうですれ。まあ玉次第ですが三十圓から四十圓ですよそれで田舍の丸持の倅でも引かけて、足を洗つて貰ふか、あわよく其家にでも乘り込む樣になればもう金看板だ。一年ばかし前に高等小學校も卒業したといふ娘が東京で奉公したいと云つて、私のとこへ來たのですがれ。こいつなか〳〵の腕利で、下女奉公よりも水商賣の方が向きそうに見へたから其事を話すと大變によろこんで、進んで木更津の料理店へ四十圓で住み込ませたのです。ところが祝儀の貰ひうんとあるし、しばらくの内に前借を返してしまつた其上、村長さんの息子に見込まれて澤山の金を使はせた上とう〳〵其家に乘り込んで今じや立派な御新さんでさあ。東京へ來る時なんぞもすばらしい身なりをして來ますがれ。……と得意になつて居る。全く此社會は別物でさあ。堅氣な官員さんの奥さんにお前るんこんな話しをしたからつて、からつきし駄目だし、吉原の女郎衆仲間の話しといつたら、どんなに面の皮の厚い野郎でもきまりが惡くて聞て居られない位だから。……然し車を坂の上に引上るのは苦しくても、下す時には梶棒さへ放せはころ〳〵と落ちる處まで行きますよさあ堅氣の娘でも此道へ入れば、又其氣にもなりますから妙なもんですよと亭主大に乘氣になつて話しをして居ると。御免なさいましと訪づれて來たのは三十餘りの小粹な女と皺くちやの婆さん二人。萬事を吞み込み顏で老婆の話すのには。

實はれ此子は、此夏迄吉原に居たのですが火事で燒け出されるし、

洲崎で稼業をして居ればほら先立つての水でれどこへ行つても間が惡くて。今じやうちに居るんですが、他所へ緣付くにすれば繼子があつだりなんぞして、思はしくもなしそうかといつて遊んでも居られないから、待合かお茶屋へ奉公したいと云ふんですが。………

聞て居た亭主は煙管をぽんと叩いて。

はーお年はいくつです。

(女)、………私はれ三十五なのよ。もう婆さんでさあれ。………

(亭)、………そうですか今口のかゝつて居るのは皆若手好みなんですが………然し或御隊居樣の家で、御飯を炊いたり世話を親切にして吳れる、三十位の女中をといつて來て居るんですが。當分其方へ行つてゝ甘い口のある迄働いて見ちやどうですれ。

(女)、………あらまあいやだわお三どんなんぞ私には駄目よ、何も今困るつてんじやないんですものと。云ひながら袂から敷島の箱を出してスパ〳〵。

一所に來た婆さんは曰く。妾奉公でも甘い口はないかしら………と獨り言。

亭主はこれを聞て妾だつて無い事はありませんが、小間使兼用といふ若い向でも、六圓から十圓が山ですよある大臣さんに上つた妾が二十圓だてんでめつぽういゝ價だと評判してる位だかられ。……と妾奉公の世話を餘り好まぬらしく見へる。

女は吹ひ殼を火鉢にさして、又御世話になりますわ。と挨拶もそこ〳〵駒下駄ならして出て行く。

私はいろ〳〵面白い話を聞たので、下手な寄席に行つたよりも興味を以て其主人に一體藝者なんかの世話をして其手數料はどの位のものですかと問ふた。主人の答へに凡て一割ですれ。百圓だと十圓三百圓だと三十圓ですといふ。それじや五人も世話すれば月に百圓餘りも收入がある。たいした金儲けじやありませんか。と大笑ひをする。話し好な亭主は膝をすゝめて、先日も昔は士族だつたが今は大變困つて居るので、女學校の一年迄も勉强させた娘を藝者に賣り度いからといつて來たから、何しろ本人を見なくつちや話しが出來ないから近い内に其子を連れて御出なさいと云つて返したのですが、藝も出來るし顏も飛び切りだと新橋なり柳橋、赤阪といつた本場へ出す事も出來るんだが、顏も普通藝も一通り三味線の調子がやつと合ふ位だと、下谷か神樂坂あたりがおちですかられ。然しそれも運次第其娘の腕次第で、めつきりと賣り出して流行つ兒と金看板になればまた大したものですかられ。

それで其人の云ふのに、娘は藝者にするが娼妓にしたく無いから、客を取らせるなんて事の無い樣にと云んでさ。こんなわからない事を云ふから、私しやそいつてやつたんだれ今時高い線香代を拂つて藝者を買ふんだもの、客を取るの取らないのなんて公然の秘密だそれもまあ廿四五にもなつて姐さん株になつた上で、いやな客ならそう招んで貰はなくてもと思へばポンと肱を喰はして、私しは藝者だ娼妓じや

ありませんよ、てなことも言へるんだが、それ迄がなか〱の丹精だ下地つ兒が一本のひろめをして其當時は苦しいの何のと溢しても、此道ばかりは又格別で、立派な旦那に見こまれて、足を洗つて貰つて粹な妾宅に住へる樣にでもなれば、結構じやないか。

以前私しの口入で藝者になつた娘は、其時分に陸軍の少佐であつた今の旦那と出來合つて、ずい分苦勞した上句運が向て來たといふものか、旦那は二度の戰爭にも行つて來るし、先日お前さん大將になつて、然も男爵、華族さんの令夫人だもの、すばらしいじやないか。これが堅氣の嫁入だと、先づ分限相應でなくちや緣組が出來ないが、藝者にでも成つて居れば、氏無くして玉の輿に乘られるし、親や兄弟の爲にもなろうといふものでさあ。今一つは此向ふ横町の煙草屋の娘も藝者に出て居て今の銀行の頭取の旦那に引かされて、あの家を買つて貰つて、女中の三人も付けてぜいたくな暮しをさせて貰つて、親と妹とを引取つて世話して居ますが、此間は男の子が産れたのでもう大よろこび、此節じや日本橋の邸の本妻の方からも遊びに來る、こちらからも出かけるといふしまつで、仲よく暮して居ます。だから煙草が賣れよが賣れまいが、平氣なものでさ。末じや財産は其子の物だーれ、何て仕合せ者だろうと皆んな浦山しがつて居ますよ。と亭主は自分の手柄話しに力が入る。奥では神さんと老母が何かひそ〱と話しては笑つて居る。

私は其亭主の話した親の爲めに相當な敎育も受けながら。苦界に身を沈めようといふ娘に同情の念禁ぜずそこで主人にこういつて問ふたのです。

世の中には種々な事情で、泥水に沈む娘も多くあるでしようが、そんな憐れな事情を抱への親に打明して、賴んだらいくらか金を出して吳れる氣持が違ふものでしようか。と自分の心に引比べてこんな事をいつたのです。

主人は吹き出しそうな笑をして、駄目だお前さんそんな芝居じみた古風な話しに、同じ樣にへそかいてた日にや商賣になりませんや。何しろ人間だつて商賣用の品物だもの、安く付込んで高く賣るてのが商賣人の心意氣ですもの。だから目見へに行くにしても自分は進まないが親のために行くんだ、なんて風を見せないで藝者稼業は面白いものだから自分がよろこび進んで、一つやつて見たいといふ氣になつて行かなくなくちや駄目です。

全く妙なもので先方でも氣乘りがちがひますかられ、と冷へた茶をぐつと呑み干してたばこすぱ〱。

私は奉公人を賴みに行つて、つひ藝娼妓、妾待合女中、酌婦などのあらゆる客商賣をする婦人の、大體の樣子又此人々を取扱ふ人々の心をも。窺ひ得て大に得るところがありました。

噫々神の子たる人間も、一の商品として取扱はれ女子の生命にもかへて、爭ひ守る可き貞操を踏みにじられて、當人も平氣人も平氣な之等の社會は人の罪か世の罪か……。

彙報

グレゴリー氏來る

記者

豫て報せし萬國廢娼同盟會英國支部幹事、モーリス、グレゴリー氏は愈々去る十月九日來朝せられ午後八時半新橋着の列車にて、帝大敎授ブリーデル夫妻、平和協會幹事ボールス氏、及コーツ氏、バンカム氏、ホッダー少將、ブレスウエート夫人、山室大佐、矢吹、山田、益富の各理事、矢島副會長、島田會長夫人、本多夫人、富永夫人、大園女史、戸川夫人、其他各新聞記者等二十餘名の名士貴夫人の出迎を受け、赤坂氷川町のブレスウエイト氏邸に入られた。

今春に於ける吉原遊廓の炎滅は、却つて歐米の人達に強い感動を與へ、日本の當局者が如何に之を處分するかを注目して居た。折しも我日本に於ては有志の間に廓清會の起つて其再興を非とし更に進んで全國の公娼制度を打破せんとするの運動が起つた事を聞傳へて、大に之を驚き喜んだそうな。其からして瑞西ゼネバ市に其本部を置く萬國廢娼同盟會の英國支部では、東京帝國大學敎授ブリーデル夫人に宛て丶廢娼運動に就て必要ならば應援の士を送らむと態々照會して來たので、我廓清會では喜んで其申込に應じ派遣方を依賴した。そこで倫敦支部では最も永く熱心に調査研究を重ねられたるモーリス、グレゴリー氏が適任者だらうといふので、遂に今回同氏の來朝を見るに至つた譯である。

同氏は今年五十二歲の、白髮既に半禿げて髭さへ悉く眞白であるが、でつぷり肥つた赭ら顔に、絕えずにこ〳〵と微笑を湛えて、一見如何にも溫厚な

好紳士たるを伺ひ得られる。

氏の語られる處によると、一八七五年にジヨセフ井ン、バークレー女史が始めて英國に廢娼運動を起してから八年目、即ち一八八三年——當時二十四歳——から此問題を研究し此運動に參加せられたさうで、殆んど三十年の久しきに垂んとしてゐるが、日本には先から是非一度來て見たいと思つてゐた。そて日本の風光を讃美し、更に語を轉じ『自分の此行は何も吉原と戰を挑むが爲などでは決してない、平和に此問題解決にお助けをしたい考へで、滯在の日數も運動の方法も、凡て廓清會の決議に從ふ積りである。何樣バークレー女史の言つた如く、凡ての運動には四つの時期があつて殊に革新運動に於て然りで、第一期には馬鹿らしいといふ世評を受け、第二期には狂氣じみたといはれ、第三期は漸く成程と言はれ第四期に於て始めて完全な勝利を收むるに至るのであつて、吾々の事業も其通り、世界何れの國の大都會にも醜業婦の居らぬ處はないから、之を全滅しやうといふのは、元より永遠の奮闘で要するに持久戰と云はねばなりますまい。乍併我萬國廢娼同盟會の事業は、着々其効果を擧げて來て、支部は各國にあつて、米國ではジヤンニイ博士、佛蘭西ではイヴギヨー氏、獨逸ではシヤビン夫人、伊太利に於てはミラン大學教授ピタッツイ博士等が盡力せられ、墺太利と露西亞にはまだ支部はないが、有志者の間に此運動のある事は事實で、各方面から集る報告は何れも極めて有望であります』云々と語られた。

で本會は、去る二十二日午後一時本會顧問大隈伯爵邸に於て同氏の歡迎會を開いた。此日は生憎の豪雨であつたにも拘らず、内外の紳士貴婦人數十名に及び、殊に態々上州安中から柏木義圓氏、横濱から城戸順子氏等も遠く來會せられた。二時伯は三紋付の輕裝で客室に現れ、來會者に一揖し、グ氏と會話を交ふる事數分にして伯は自ら一同を植物溫室内に導く、時ならぬ、處ならぬ綠樹紅草に擁せられ、玻璃屋根を打つ蕭々たる秋雨の音に一層の感興を添え

て、矢島副會長司會の下に開會、最初に江原素六氏、次に小崎弘道氏は起ちて交々グ氏遠來の勞を謝して歡迎の辭を述べ、安部副會長及コーツ氏は之を英譯し、グ氏はやをら身を起して答辭を述べらる、これ實に氏が來着以後廢娼問題に對して發する第一聲であつた。(本誌論議欄參照)茲に於て大隈伯は起ちて、廢娼の決して不可能ならざるを論じ、明治五年の解放令に就て說く處あり、最後に大森兵藏氏は過般來朝せられたるジヨルダン博士が廢娼問題に關する意見を記せる同氏宛の書簡を朗讀し、別室に於て談笑の裡に茶菓の饗應を受けられ、五時過散會した。

更に翌二十二日午後六時、神田區美土代町靑年會館に於て、グ氏歡迎の廓淸大演說會を開いた、何がさて辯士は山室大佐、安部副會長、浮田博士と云ふ顏觸れに、グ氏最初の公開演說であるから、定刻前聽衆堂外に溢るゝの盛況を呈した。益富理事は先づ起ちて開會の辭を述べ、救世軍大佐山室軍平氏登壇、此頃舞鶴軍港の水兵が寄せたる手紙を朗讀し、其水兵の一團が斷じて花柳の巷に足踏せぬと云ふ決議をしたといふ事例をあげて、軍隊所在地に遊廓を必要とする論者の妄を駁し、次に法學博士浮田和民氏は「廢娼問題」と題して科學的に縱橫研究の結果を說き、竟に公娼の存在が衞生風紀の二方面より全然無効なる事を明白にし、安福孃は特に本會の爲に餘興として其巧妙なるピヤノ一曲を彈奏せられしは吾徒の深謝する所である。ついでグ氏は小畑久五郎氏の通譯にて、歐洲に於ける此運動の歷史より、進んで穩健なる廢娼論をやり、特に靑年の向上心に訴へて、破るゝが如き喝采場裡に降壇、大森兵藏氏はジヨルダン博士の廢娼論を紹介し、本會副會長安部磯雄氏は、梅毒患者の無料診療と普通敎育普及の必要なる所以を、英國に於ける實例をひきて痛論し、茲にグ氏歡迎演說會は大成功を以て九時半閉會した。倘各名士の演說は次號に於て讀者に紹介すべく胸襟を開いてグ氏の指導に待ち、大に吾徒理想の顯現に努力する覺悟である。

在米島田會長の消息

記者

本會々長島田三郎氏が、在米日本人會の招待により、新渡戸博士と共に、目下米國の地に居らるゝ事は、本部便りに於て讀者に報道して置いた通りであるが、其後の報道を聞くに、殆んど同地空前の大歡迎を受けられつゝあるは、吾徒の喜びに堪えざる處である。

兩氏は上陸以來、或は演説會に或は視察に、何れの地に於ても早朝より晩遲くまで、殆んど一時間の休憩時間もない程に引廻はされてゐると云ふ譯であるが、熱誠なる兩氏は凡てを打忘れて活動せられてゐる。で萬一健康に故障でも起らねばよいがと、同地の人々は心配してゐる位である。今會長一日の行程を記して見れば。或日の如きは、ウォーナッグローブから、ボーデン、ライデ、アイルトンにかけ三十餘ケ所も訪問して、其上に演説會や招待會に臨み、櫻府に歸られた程である。

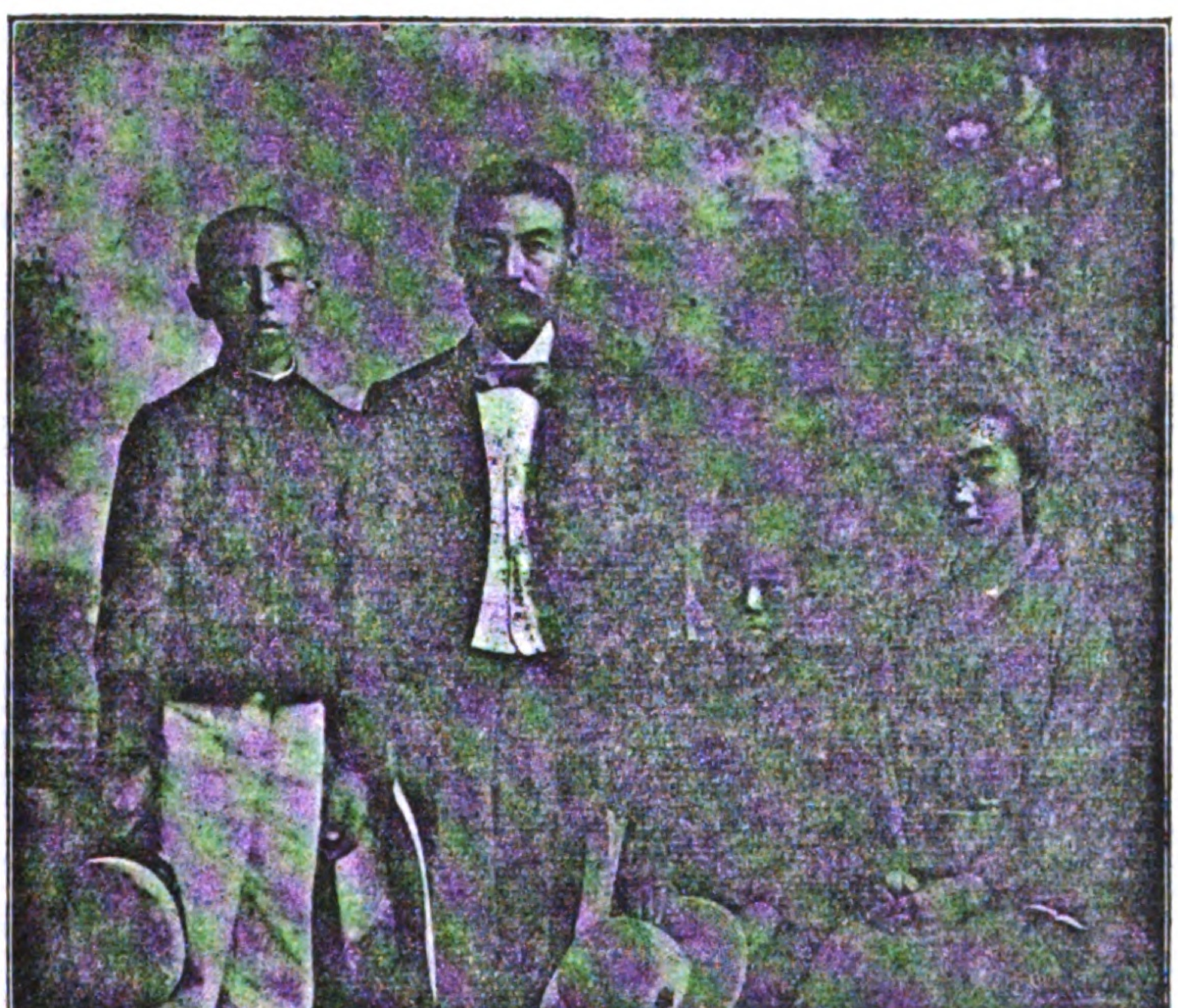
『日本に於ては新渡戸博士と云ひ島田氏と云ひかけがへのない人なるが故に、案内者がプログラムを作るのに大に注意し、三ケ所見る所は一ケ所にして、其かはり委しく其地方の狀況を説明する事にし、出來るだけ休養を與へる樣にしたい。』と某新聞は其社説に書いてゐた。以て如何に其東奔西走しておられるかを知るに足るであらう。

加之、同地發行の新聞は、毎日〳〵其社説に於て其雜報に於て、兩氏の運動の狀況を詳報してゐる。假令ば日米新聞の如きは『名士接待に就て』と云ふ社説を掲げて、『在米同胞の招待に應せられて、島田新渡戸兩氏の駕を枉げられたるは在米同胞の大に感

謝する處で、同時に充分なる視察と充分なる指導とを仰がなければならぬと云ひ。兩名士を招待したるは在米同胞の實狀視察を乞ひ、其高説を聞き以て將來の發展を劃せざるべからざるものなれば、一切の材料を具して其視察を乞ひ、併せて其高説を聽く可し。』と注意をしてゐる。以て、在米同胞が兩氏を見る事恰も子の父に對するが如く、仰いで指導を受けむとする眞情の流露せるを見るのである。

又某新聞曰く、『島田新渡戸兩氏桑港に上陸して僅一週日を經過したるに過ぎずと雖、席温まる暇なく日夜の大活動により、內在留民をして向ふべき所の針路に光明を與へ、各をして其堵に安んぜしめたるのみならず、外米人に向つては日本國民が如何に兩國間の平和を熱望しつゝあるかを知了せしめ、殊に米人間に久しく誤解せられたる日本國民の民性と、國情に關して遺憾なく說明せられたるは、兩國親善の爲に多大なる貢献をされたるものと云はざるべからずとて。種々此日米間の問題に就て說き、最後に

島田會長の家庭



向つて右より 島田夫人信子、令息
島田會長、令息

吾人は日米親善の爲に甚だよき代辯者を得たるを喜ばずんばあらず。』と記してゐた。更に島田會長の王府の大演說會に於てなしたる『勞働神聖論』に就ては約二段に涉りて之を稱揚し、吾人は此同情ある熱誠ある言葉に一層自己天職の尊貴なる所以と、此天職を完うする大なる責任の存するを思はずんば非る也とて、之を感謝し。『在米同胞の覺悟』てふ演說に對しては、在米同胞諸君にして今日の日本が政治上、經濟上如何なる境遇にあるかを知らば必ずや眞の覺悟を定むるを得べし、とは島田氏が在米同胞に與へたる意味深長なる警告である。と云ひ、最後に、故國今日の境遇は彼の如く、在外同胞に關する故國朝野の意向は如斯なる上は、在米の同胞は國家のため將た民族の爲めに此際充分なる覺悟を定めて、永住の決心を固め益々前途の發展を劃すべき也、云々と云つてゐる。

要するに我會長の一言一行は、電の如くに閃めき、預言者の聲の如く在米同胞の間に重んぜられ、又其反響を示して居る。尙其演說會が如何に盛況でありしか、左に日米新聞の記事を抄錄しやう。

『桑港日本人社會ありて以來、茲に二十有餘年の歲月を經たりと稱するも、昨夜スカッチ、ライト、テンプルに於て開かれたる島田、新渡戶兩氏の大演說會程盛大なりしはあらざるべし。定刻前より詰めかけたる聽衆無慮二千名、さしもに廣き大ホールも立錐の餘地なく堂內に入るを得ずして空しく歸れるもの亦少からず、これ固より兩先生の德望一世に高く其使命の大なるが爲ならむ云々。』

島田先生に奉る　桑港　月　影

北の荒鷲おづるなさ、　南の鯨したしめさ、
教へし人を今此處に　迎ふる事の嬉しさよ。
儒道は地をば拂ひたる　濁れる世にも清らけき
君子の人を君に見る。
道ある者は言ありさ、　君が懸河の雄辯は
その仁よりぞ來りける。
牧者もあらぬ此野邊の　羊は君を繼ふるなり。
抱き給はずや此羊。
君が牧杖つくさころ、　靑草はしも生へまされ、
淸けき花も咲き出でよ。

大日本男子貞操會

大日本男子貞操會は、東京府下下澁谷なる角谷和平氏等の設立されたものである。過般同氏は態々廓清會本部を訪ひ、我廓清會の設立を喜び本會の事業を援助すべきを約された。吾廓清會は唯に公娼を廢止せむとするに止まらず、進んで男女間に貞潔の德を奬めんとするにあれば要するに同會の事業は我廓清會事業の一たるに外ならぬ。吾々は斯の如き團體の天下至る處に隆んに起らんことを望むものである。左に同會の主意書を紹介しよう。

大日本男子貞操會主意書

上に連綿たる一系の皇統を戴き下に忠君愛國の民を以て滿たされたる我日本帝國は建國茲に三千年今や世界の大帝國として嶄然其頭角を現はし列國の班に列して一等國の地位を獲得し宇内の耳目を聳動するに至れり豈國家の慶事國民の幸運に非ずや。(中略)

然るに翻つて我邦現時の狀況を觀察すれば前後二回の大戰に勝ち誇りたる餘弊漸く社會の各方面に暴露するに至り天下の識者をして憂慄に禁へざらしむるもの尠からず殊に社會組織の原素たる男女兩性の關係近時著しく紊亂し婦女にして貞操の何たるを解せざる者、男子にして婦女に對する態度の横暴狂亂なるもの等日に月に其數の多きを致し甚しきに至つては最も神聖にして嚴格ならざる可らざる家庭の墮落腐敗を招徠して尙且意に介せざるものすらあらんとす斯の如くにして古來人類の美德、人倫の要義として遵守されたる男女の道は漸く地を拂ふて獸的肉慾主義の邪道之に代はらんとする傾向あり蓋社會の事たる其本を治めずして其末の治まれる事あるを聞かず其源淸からずして其流の淸を求む可らざるは理の當然にして人類美德の根底、人倫の大本たる男女の道今の如く亂れて何ぞ夫れ家庭の圓滿高潔なるを得べき況んや社會道德の隆興をや社會の道德隆興せずんば何ぞ社會の發達國家の振興を期す可けんや。

去れば吾等同志の士は現下男女關係痛く紊亂せるを目して道德の根本的破壞たるに止まらず延いては社會衰亡の第一步、國家不振の初めなりと絕叫せんと欲す故に此理由を更に推擴して考ふるに男女兩性の關係を高潔に維持する能ばざるものは則之れ君に對しては不忠、國に對しては非愛國、國民としては最も下劣極まる行爲を敢てする者なりと斷ぜざる可らず古より忠君愛國を以て世界に誇り義勇奉公の最美なる精神を以て國家の鞏固を致したる我帝國民にして前述の如く反道德、非愛國的行爲あるべしとは殆ど想像し難きに似たりと雖も焉ぞ知らん世の愛國を口にし忠君を唱へ義勇奉公の精神を鼓吹せんとする紳士にして不埒にも此不忠君、此非愛國此下劣極まる行爲を敢てして恬然恥ぢざる者多々ならんとは豈驚く可きの現象にあらずや。

吾等同志の士は以上の理由に基き茲に本會を設立して專ら男子の貞操主義を鼓吹し而して現代淫靡の悪風潮に反抗するのみならず極力之が掃蕩に努め一は以て修身齊家の爲にし延いては國家社會に貢獻せんことを期するものなり故に吾等の信條は男子の貞操を標榜して躬行實踐を旨とし各自人倫の本分を盡くすと共に他をして自ら同化せしめんとするに在り若夫れ現時の時勢に鑑み吾等と感を同うする憂世愛國の士は其老若と既婚者未婚者とを問はず奮つて來り贊せられんことを。

よもやま

▲自由廢業のため拘留とは何の故ぞ

先月の中外商業は、娼妓の自由廢業を助けて、拘留二十日間に處せられたる事實を報道して居る。曰く

芝區三田四國町二番地一號、魚商小出平吉(三四)は、三人の子供あるのに、昨年の八月中より北品川四十六番地貸座敷、岡澤樓事平井峰吉方の娼妓光子事眞保お濱(二四)の許に通ひ詰め。同人が來年三月年明けとなるに拘らず、自由廢業して、夫婦にならんと教唆し。本月十四日平吉は光子の代理として、三田署に自由廢業の申請をなせしに、所轄違ひなるより跳れ付けられ。失望して居る折しも、同署に居合せし京橋區某通信社の社員、新見英次郎(二九)に依賴し、十八日午後六時頃、小出は同樓に登樓し、光子と喋し合はせ外出し、附近に待ち居り、次で光子は警察へ行くとて、同樓を飛び出し、品川署に至り自由廢業を申請せるに。前記小出には妻子ありて、同人の教唆せし事判然せしかば、説諭の上樓主に引渡されしに。同夜十二時頃に至り、新見は金五圓を小出より貰ひ、同樓に登樓し。…事服部お仲(二三)を敵娼として、同人に依賴し光子に手紙を送りしより、乍ち品川署に引致され、取調の結果廿一日小出も、同署へ引致され兩人共に各拘留廿日宛に處せらる。

之は甚だ奇怪なる事である、妻子があると云ふ事が分つたから、本人へ引渡さなかつた事はよいが、其れなら娼妓は其故郷にても歸らせばよいではないか、説諭して樓主に引渡すとは、どんな了見であろうか。況んや廿日間の拘留とは如何なる譯であるか、聞き度いものである。此娼妓をして速やかに正業に就かしめるといふ事は、警視廳の望む處であるとすれば、若し廢業を希望する娼妓あらば、如何にもして其目的を遂せしむるよう助力して然る可きではあるまいか。

▲一朝の過ちより數年の苦節を泡にす

一朝の過ちが千秋の遺恨となる事婦人の貞操の如く著るしきものは無い。空二階を男子に貸したのが誤りで、數年の苦節も水の泡と消失せた左の話は記者は實に氣の毒に堪へぬ一人である。

神田區三崎町三の一缺商〇〇女(三六)は、靜岡縣沼津町の生れで、元は相當の資產ありしが。十八歳の時同地警察所詰の警部某氏を婿に迎へしに、夫たる某は藝者の色に溺れ、其家の財產を悉皆費消したる上、長男某(一八)長女お〇(一六)と云ふ二人の子迄あるをも顧みず。馴染の藝妓と驅落して仕舞ひたり、これより妻たるお〇は、老母と二人の子を抱へて、一錢の收入もなき境遇となつたるが、零落の耻を晒すならば、いつそ東京に出でんと。今より十六年前、家財を賣りて上京し、赤坂區氷川町の裏長屋を借り受け。燐寸の箱張り及び裁縫を職業とし、近所の者の舌を卷く程に日夜精出して、一家の扶養につとめしが。其甲斐ありてやゝ生活に餘裕も出來、二人の子供も學校に通はせ、老母も安心して老先を樂しみしが。天は老母の命を召して、昨年不歸の旅に赴いた、お〇は其れ迄六年間一心に勉めしかひありて、順境となりし折から。淋しければとて、自宅の二階を貸與したるは、日本橋區本町三丁目博愛堂藥舖の通ひ番頭と稱する大〇〇(二六)の巧妙なる誘惑に落入り。多年の貞操は爰に蹂躙されて、唯ならぬ身となつたのである。

茲に神田區今川小路一の一〇木〇太郎(二一六)さ云へる人は、其女の同郷人にして、女の健氣なる行爲に感服し、資金を貸與して、前記三崎町に絲商を開業させたる、特志家も、事既に茲に至るを知りて呆れ果て此上は世話甲斐もなしさて、女の身二つになるさ共に貸金を取戻し、遂に絲店は閉店の破目さなつたのである。其女は去月小石川區水道町に一時身を隱したるも、一度び心の駒の狂ひ初めたる彼は藥舖の番頭さ手を切りたる後、更に他の男子さ情を通じ、近頃同區竹早町へ移轉したりさか。

實に男女の貞操は貯水地の水の如く、蟻の一穴より洩れ始めて果ては止め度もなく、大堤防も遂に破壊する事になる、怖れ戰きて護む可きは實に男女の道ではないか。

▲飽く迄暴利を貪ぼる遊廓の惡風

看板は一圓さか五十錢さか書き出して置き乍ら、其實三倍も四倍も甚だしきは九倍も十倍も請求するのは、遊廓の慣用手段ださいふ。左に揭ぐるは、嘗つて日本新聞記者が西洋人に扮して、吉原某樓に上つた時の記事である。而して斯の如きは有勝ちの事で、敢て珍らしき事では無いさいふ。警察は何故に今少しく嚴重に之を取締らぬのであろう。

『貴樣の樓は斯ういふ詐僞的行動をやつて、商賣をしても好いさいふ、特別の許可を、其筋から受けたのか、この書出しは何だツ、八圓五十六錢、失敬ぢや無いか、貴樣ツ……御酒肴共七十五錢、さいふあの入口の看板は何の爲に書いた、二人前さして一圓五十錢ぢやあないか、主人を呼べツ、主人に來いさ云へツ』

『どうも誠に相濟みません、併乍手前の店では、決して他樓のやうに、ボルなんてことは致しません、御約束は七十五錢ですけれども其他に別に二人の花魁へ、玉をつけて居ります。又好い酒を持ツて來いさの御吩咐でござゐましたさうで、それから御肴も別に御注文がありましたので……』

『酒をいくら飲んだ、肴を幾種取つた價が三十分そこらに七圓いくらさいふものが食へるか。馬鹿奴ツ。我々をはじめて吉原へ來たものさ見損つたか。馬鹿にするな、貴樣では分らぬ主人を呼べツ』

『主人が參りましても、手前でございましても、申上る事は申上ます。出しました程の御代は頂かなくては手前共の商賣に相成りません。どうか御下げを願ひます、充分に召しまして後で兎や角う仰せられましては御無理でございます』

『御無理たあ、何だ、貴樣ツ……何さ云つても拂はぬ、附出しを直して來いツ、一人前七十五錢宛なら拂つてやる、馬鹿ツ』

『よろしうござゐます、どうしても御下げ下さいませんなら、好む譯ではござゐませんけれど、戴くさころへ出て戴きます。ヘイ。』

『益々失敬な事をぬかす、好しツ面白い、出るところへ出ろ、同行の外國人を誰ださ思ふ、米國で有名な紳士だぞ、日本に貴樣の樓のやうな奸商が居るさいふ事を聞いて、實際か否かを觀察に來られたのだツ。出る處へ出て見ろ、大使館から外務省へ照會になる、國辱ださいふので、貴樣の樓は營業停止、主人へは繩が付くから、さう思へツ、さあ早く出ろ、』

▲救世軍さ吉原との會見

救世軍の活動のため、連日娼妓の自由廢業者續出するより吉原遊廓に於ては大に恐慌を來し、代表者五名を選みて山室大佐に對し、矢止にも哀憐を乞はんさして去月來大佐に會見を申込んでゐたが、愈々去る三十日廓清會本部樓上に於て會見するに至つた、詳細は次號に於て紹介しやう。

This is becoming more and more the case all over Europe.

But just here it is necessary to insist upon the fact that the struggle in which we are now engaged, has not for its *central* point the idea of "Purity." That point of view is true for *individual morality*. But whilst individual morality is of the highest importance to the welfare of the community, from the point of view of the State and of the Law it is *individual liberty* which is the essential question for consideration.

As one of our greatest European Abolitionist legal experts has said again and again in our International Congresses:

"It is not the duty of the State, (the Law), to say 'Purity' 'Purity' to the people, but to secure within its jurisdiction that there should not be one single victim sacrificed to others. It must guarantee and protect the liberty of each person under its control."

May God hasten the day when there shall not be one single victim sacrificed to others in all Tokyo, and in all Japan! That is what we have to work for steadily and persistently.

I have a vision that a wonderful work is going to develope out of your work in Japan, right throughout Asia. As you pound away with all your energy at the licensed system here, and strive for the same freedom for women to leave the life that there is for men, I beg of you, whether the struggle be long or short, never to allow yourselves to think of it as a weary one. It is not. It is a glorious fight, all along. As you go on, you will find the same beneficent agencies springing up here in Asia, as has besn tha case in Europe. For every weed that you uproot, a flower, more beautiful even than your beautiful chrysanthemums, will grow in its place. The old system will die out, as it is dying out in Europe, and in its place will rise vast works of benevolence, worthy of your great country. That is my vision, and I believe that Japan will become, what she ought to be altogether, instead of only partially, the Light of Asia.

I have raised a number of points in this address which I shall be glad to deal with at length and in detail during my stay in Japan in public addresses or in private interviews. An office has very kindly been lent to me at the Seinen Kwai-Kwan, where I shall be happy to meet any of you by appointment, and answer any questions that I am able, and those questions that I cannot answer, I will forward for you to our experts in Geneva and Paris and London.

Just two more points. One of the papers announced that I had come here to conduct a "War on the Yoshiwara." I am a member of the Society of Friends, and as far as I am concerned, it will be a very peaceful war. I have come to Japan without an unkind feeling towards any one. The very worst that I wish even the keepers in the Yoshiwara itself, is that they may very soon be in another occupation, where they will make a great deal more money, a great deal more quickly, in ways that will benefit the community instead of injuring it.

Mr. Maurice Gregory stays in Mr. Gilberd Bawles's, No. 30, Mita-Kōunchō, Shiba-ku, and his office is in the Tōkyō, Y. M. C. A., No. 3, 3-chōme, Mitoshiro chō, Kanda-ku, and he will meet any one gladly by appointment and answer any questions about the Abolition.

tant papers of Europe at considerable length, and made a deep impression, and I think that every well-wisher of Japan desired that it should never be built again.

But I think that a still deeper impression has been made, wherever the fact was known, that your society has been started to bring the whole system to an end, throughout the country. The manager at the London office of one of our great amalgamated banking corporations, with 200 branches in different parts of the country, and annually turning over an immense capital, was surprised, astonished and pleased to hear of your movement for Abolition.

Just as the drink question is the great blot on our country, so, in the eyes of all that is best in Europe, is this system the great blot on your noble country. I repeat that the special form of slavery occuring in licensed houses is, and always has been, very small in Europe compared to that of Japan, and has, moreover, been steadily decreasing for many years, with the best results on the health of the population.

The very first question that one of your newspaper reporters asked me was, "What do you propose to put in its place?" I answered, "That is for the Japanese to say. It would be impertinent for an Englishman to advise you on the subject."

But I will tell you what we have put in its place, and what we are putting in its place, all over Europe.

First: A large network of agencies for helping young women, called "The Friends of the Young Girl". This Association has 13,000 ladies, scattered all over Europe, ready to help any young girl in need of help, and hundreds of Homes and Institutions affiliated to it.

Second: An International Agreement between all the great powers of Europe to suppress the traffic in young girls for immoral purposes between the different countries. Every one of the powers of Europe, and the United States of America has signed this agreement, and it would greatly rejoice our hearts when the Government of Japan joins in with us.

Third: A multitude of agencies for raising the moral level of men. One of the most recent of these in England (there are a number in other countries as well) is the Alliance of Honour, of the Committee of which it is my privilege to be a member. It was started by two young city clerks in their spare time in a room on the third floor of a private house, and has rapidly grown to more than 20,000 members. At the Annual Meeting, recently held, our King George sent a telegram of warm sympathy with the objects of the Alliance, which telegram was received with the most tremendous enthusiasm by the 5,000 young men present. The Alliance has now splendid offices with a staff of sixty unpaid clerks, who give up their evenings in rotation to helping in the vast correspondence which is now necessary. Each of these twenty thousand members is pledged to help other young men in his own circle by every means in his power. The latest developement has been to endeavour to start a branch of the Alliance in every place in the East where there are young Englishmen at work.

Fourth: A system of free and kindly treatment of venereal maladies. To this system the younger generation of medical men throughout Europe are more and more inclining, in place of the Regulation system.

Another very encouraging fact is the friendly co-operation of the police and all our philanthropic agencies.

in the springing up amongst you, during the past fifteen or twenty years of a feeling of repulsion for the Regulation system. The material prosperity of, a nation is good the intellectual prosperity of a nation is still better, but the moral prosperity of a nation is greater than either, and without moral prosperity, neither material nor intellectual prosperity can continue permanently to exist. We have a very strong evidence of this in the West. Our ideals of art largely come from Greece. Our ideals of literature are largely founded on those of Greece and Rome. Our ideals of law are largely those of Rome. Greece and Rome were great and mighty empires in their day, but both failed, because though materially and intellectually strong, they were morally weak. We feel that we need to follow all that is good in them, and avoid that which was evil.

To-morrow night at the public meeting at the Seinen Kwai-Kwan I hope to go into details in the matter, and describe the situation in each of the countries in Europe. For the moment this afternoon I will confine myself to the statement that more and more throughout Europe the Regulation system is coming to be regarded as profoundly unjust towards women, profoundly dishonouring to men, and profoundly unscientific in its character. These are the three Propositions which I desire to defend in public and in private during my visit to this country.

One of your Committee has, however, asked me definitely now to make the statement in this my first address, that nowhere in the world is the question of State Regulated Vice so vast and so complicated as it is in this country. You have for instance, I am told, no less than 572 licensed houses in Tokyo and its suburbs. Paris, which is somewhat the same size as Tokyo, has only 48 such houses, including the suburbs. Please do not misunderstand me. In both towns there is a very large amount of immorality outside the specially licensed houses, but the special slavery which the licensed houses indicate is in existence only in the proportion which I have stated. Throughout my visit, my intention is to avoid comparing Japan with other countries, and it is only by special request that I make this exception here. I am also requested to add that the number of women in each of the houses in the two towns is about the same.

Your system has been very well known in Europe for many years. My first impression of it as a young man was of wealthy young Englishmen who had gone out to the East and who had been ruined here. A famous series of paintings were shown in the Paris Saloon, and afterwards exhibited in London, called "The Modern Prodigal Son." The first picture represented a wealthy Parisian father, counting out the expenses of a journey round the world to his son. The next picture represented him in the Yoshiwara at Tokyo, with its lights, and cherry-blossoms, and beauty and sin. The third picture shows the son, with his money spent, in a state of destitution, working his way home on an American battleship, the very lowest and hardest of work then undertaken by Europeans. The next picture shows the kind old father, welcoming him back in all his misery, and the last picture shows the whole reconciled family sitting down at one of those dainty dinners for which the French are so famous, with the prodigal son clothed and forgiven.

The burning down of the Yoshiwara was reported in all the impor-

harvest of the sea was going on throughout its length. I saw, as never before, the appropriateness of the saying that Japan is the England of the East. With such a splendid hardy fisher population you are indeed destined to be one of the greatest maritime populations of the world.

But that thought was again eclipsed by the loveliest harvest that I have ever seen, the second harvest in the year of your wonderful country. As our splendidly equipped express train sped on hour after hour all day long from Tsuruga to Tokyo, every foot of land seemed to be cultivated to its utmost limit, and it was just one huge garden, with even the hills terraced with neat and well-built massive walls, holding back the rich soil. Then there were the pretty little villages at every few furlongs distance, the larger ones with their fine schools, and when I remembered that this long day's journey only represented a small part of your total agricultural population of forty millions, I felt like the Queen of the East when she visited the court of King Solomon, that there was no more capacity for wonder left in me, and that one half had not been told me. Your mighty Fuji yama piercing the clouds for above its attendant massive range of mountains, also greatly exceeded my expectations.

Fresh surprises came in the journalists with their keen intelligent questions that met me, many miles before we got to Tokyo, including a clever Japanese lady journalist, enquiring about the progress of the suffrage movement.

Then came your altogether too kind reception of me at the Shimbashi Station, the Committee, Commissioner Hodder and the brave Yamamuro, and above all in importance, the noble band of Japanese ladies who are going to be the pioneers, I verily believe, of a great host which will do for Asia, what their sisters have done, and are doing, for Europe.

There are a host of good things that I want to say about your country and your people, which will have to be postponed till other occassons, but there are one or two more things which must mention here, before I deal with the special object of my coming. First your wonderful mechanical ingenuity. We have been acquainted with that for many years in Europe in all your pretty nicknacks, but I was greatly impressed the other day when I was admiring your great new buildings and the huge new Central Station now going up, and it was explained to me that they were framed with elastic joinings, to stand your earthquakes. But the very next day I noticed the very same principle applied to the three-centuries-old huge and massive walls of your Emperor's Palace.

The very large equality in the education that you give to your boys and girls, is a fact, the statistics of which I have quoted with great effect in addresses given to Indian University students. I wish to utter a word of admiration also for the splendid discipline in your schools, carried on by teachers who are expected to rule, and succeed in ruling, their scholars without harshness.

The good fellowship between the officers and men in your army, which is also becoming an increasing power for good in our army and navy, and the way in which your whole nation is knitted together in thought as one great family, must also be noted.

Now to the question of Regulation. You are profoundly to be congratulated that you are beginning to come into line with the whole of the best of the thought in Europe and the North American Continent,

Gonorrhoea, produced by a minute plant, Gonococcus, produces blindness in children, sterility in women, and no one has even been sure that it is cured, or that it will not return to wreck the lives of the family.

There has been but one successful way of dealing with the victims of these diseases, that is to segregate them, men and women alike, in hospitals, until they are cured.

The mighty evil itself has been most successfully treated by the method known as the "Iowa Law." Under this law, any house in which a prostitute can be proved to practise her trade, shall be officially locked up for one year, and no one shall be allowed to reside in it, in that time. This throws the punishment where it belongs, on the owner of the house.

In any event, let us hope that the Yoshiwara of Tokyo will not be rebuilt, and that those degenerate men who demand the social evil for their own selfish ends, will remove themselves to less favored towns.

A legalized Yoshiwara is an official partnership in crime. It could only be tolerated by the proof that crime and disease are less prevalent on account of it.

It is impossible to prove that this is so in the countries of Europe; I cannot believe that Japan can transmute vice into virtue where other nations have failed.

Sincerely yours,

David Starr Jordan.

The World Movement for Abolition of State Regulation of Vice.

By Maurice Gregory.

Address at reception at Count Okuma's residence, Saturday, October 21st, 1911.

Count Okuma, Ladies and Gentlemen, and Dear Friends: I feel it one of the greatest privileges of my life to stand before you as the altogether inadequate representative of a great cause.

I have worked in the Abolitionist movement since I was twenty-four years of age, in 1883. During that period I have visited in its interests between three and four hundred towns and political centres in the British Islands. I have crossed to the Continent of Europe about forty times in its service, paid two visits to America, lived three years in India, and paid two subsequent visits to that Empire.

There are two reasons why I esteem it to be a great privilege to be here this afternoon. First, because I am the pioneer representative, though, as I have already said, a most inadequate one, of a great and mighty cause, a cause to which the lives and influence of a host of noble men and women, young and old, have been devoted in the West.

But there is another reason, and a very important one. Not only do I feel that I have come to a great and noble country, a country with a wonderful past, a wonderful present, and a wonderful future.

It is my habit, in every new country that I visit, to find out all the good about it that I can, and that is what I have been doing here since I landed, and before I landed.

Never shall I forget my first sight of Japan, whilst it was still dark, in the early morning of October 9th, and the wonderful illumination of the lights of the many hundreds of fisher boats, all around the beautiful Tsuruga Bay. Deep were my impressions when I thought of the fact that what I saw was hardly a thousandth part of the coast-line of your Island Empire, and that the same pretty illumination, and the same bountiful

THE KAKUSEI

Vol. I Tokyo, November, 1st, 1911. No. 5

CONTENTS.

Yoshiwara Must Go.

Dr. D. S. Jordan.

Mr. H. Omori:
My Dear Sir:

In answer to your question of last night, permit me to say:

I regard the Yoshiwara system as a curse to Japan, and as a blot on the good name of a good nation, I sincerely hope that the burned Yoshiwara of Tokyo will never be rebuilt.

I have not studied this problem in Japan, but I imagine that the conditions here must be not very different from those in other countries.

A licensed brothel is an official recognition of crime.

It is the legalization of the spread of two of the most loathsome of all parasitic diseases.

A quarter of the city where crime and disease are made lawful and surrounded by embellishment of art and music acts powerfully on the imagination and on the curiosity of young men. It leads into immorality many who would otherwise escape.

It serves as a nest of vice, from which immorality spreads to other districts. There is not less immorality outside, but more, on account of the existence of a central plague spot.

Far more destructive than the needless spread of immoral living is the dissemination of contagious disease among wives and children and among innocent people.

The medical examinations are almost useless to prevent this, as infection may occur in many ways in spite of all inspection. The very fact of inspection involves an element of danger as leading men into taking risks in immoral action.

The parasitic diseases, slow to mature and almost impossible to cure, are sources of more sorrow among innocent people, than any other diseases whatever.

Syphilis, produced, by *Spirochoete*, a minute animal organism, destroys the capillaries of the parts attacked. If the brain be attacked it produces insanity and death. It is sometimes cured, but by medicines, severe and dangerous.

特價提供

明治四十四年十一月十日より
明治四十四年十二月卅一日まで

神學博士 高木壬太郎先生著

基督教大辭典

定價 金拾五圓
特價金拾貳圓
小包料 二十四錢
清、韓、臺、樺 四十五錢

六號活字三段一千六百頁四六二倍
寫眞、肖像、地圖、百數十葉挿入、背皮、天金、函入、上製、縦八寸八分横六寸五分

基督教大辭典は如何なる書籍か

基督教大辭典は 基督教に關する一切の事項を掲載す。故に聖書總論、聖書神學、聖書歴史、聖書古物學、組織神學、教會史、教義史、哲學史、文學史、傳道史、人物傳記等を合せたるものに均しき實質を有するものなり。

基督教大辭典は 四六二倍判一千六百頁。全部六號活字、一頁三段、二十三字詰、九十三行、字數凡そ三百四十二萬有餘、説明を施したる辭數、實に三千一百有餘項。挿畫百四十三個。附録の基督教會年表は、二千年間の事實を一見明瞭ならしむ。

基督教大辭典は 全部青山學院神學教授ドクトル・オブ・デイヴイニチー高木壬太郎氏の手に成る。專心辭典の著述に努めらるゝもの凡そ四年中。細微の事項をも自ら擔任せられしが故に、全卷悉く統一せらる。夫の坊間往々見るが如き杜撰なるものとは自ら撰を異にせり。

基督教大辭典は何の爲に必要か

基督教大辭典は　世界唯一の書たる『聖書』を學ぶ爲めに必要也。聖書の中には普通の日本語の觀念を以てしては了解し難き術語あり。また日本人には聞きなれざる地名や、人名や、其他の固有名詞あり。此等に關する完全なる智識は從來出版せられたる書籍にては得られざりしが、今や基督教大辭典は之が缺陷を補へり。

基督教大辭典は　基督教の教義を研究するために必要也、聖書は基督教の辭典なれども、教義の說明は之れなく、例之『生命』と云ひ、『言』といふが如き、普通の語にても教義上よりは複雜なる觀念を有すれ共、聖書を讀みたるのみにては之を解し難し。又聖書の教義は二千年の間に發達し來りたるものにて、從て其間に學說學派の相違を生ぜり。此等の事蹟を書きたる良書は是迄日本に出版され居らざりしが、今や基督教大辭典は此缺陷を補へり。

基督教大辭典は　基督教を通じて顯れたる人類に於ける神の攝理と啓示とを知る爲めに必要也。六千年を通じて神は如何なる人々を遣はして神國建設の爲めに働かしめたりしか。如何なる人々が、神の經綸の幾分を成就し人道のために戰ひたりしか、預言者、使徒、殉教者、高僧、改革者、傳道者は申すに及ばず、基督教に交涉ある國王、武將、政治家、哲學者、文學者、科學者の性行と事業とは本書に包括せらる。個々の宗教家改革者等の傳は、既に日本語を以て書かれたるものあり。然れ共、其の凡てを網めたるものは未だ之れあらず。其之れあるは基督教大辭典を以て嚆矢となす。

基督教大辭典は　基督教の歷史と古實とを知る爲めに必要也。一口に基督教といふも、耶蘇の時代より今日に至る迄二千年、預言者の時代よりは三千年、モーセの時代よりは凡そ四千五百年を經たり。此の間に起りたる幾多の宗教的外形の變遷、信仰上の觀念の進化、教會の起原や沿革や、又其經過に伴うて起りたる習慣、儀禮、行事等を知悉する事は容易に非ず。此種の書は。從來我國には之れなかりしが、今や。基督教大辭典出でゝ此等に關する一切の事項を說明せり。

東京京橋尾張町二丁目

發兌元　警醒社書店

振替東京五五三

大賣捌

東京市本鄉春木町　警醒社支店
横濱市壽町　福音社書店
大阪市北久寶寺町　福音社書店
神戸元町通鯉川筋　福音舍書店

救世軍大佐心得 山室軍平著

青年への警告

帝國新聞評　青年も大人も讀む可き書である。著者の巧みなる演說振をも見るべし。「如何にして情慾に克つ可きか」の一篇は、是非、當代の青年に薦めたし。

定價金拾錢
郵稅金二錢
部數により割引あり

救世軍大佐心得 山室軍平著

公娼全廢論

本書の主張する處は、極めて簡單なり、曰く昭代の奴隷制度、賣淫制度は一日も早く斷然廢止すべしと。或は云はむ、これ道學者流の陳腐の言のみと。然らず。本書の著者は、數十年來實社會の眞相を研究し、廢業娼妓を救濟し得たる實際家なり。理由として說く處の數項は簡單なる主張に對する複雜なる解明なり。

定價金拾錢
郵稅金四錢
部數多からば定價を割引す

賣捌　東京京橋尾張町二丁目十五番地　警醒社書店　本郷春木町三丁目二十二　同支店

廓清

前號目次

廓清　每月一回一日發行

定價表		
一冊(一ヶ月分)	金拾錢	郵稅五厘
六冊(半ヶ年分)	金六拾錢	郵稅三錢
拾貳冊(一ヶ年分)	金一圓十錢	郵稅六錢

◎御注文は一切前金に發賣元へ願上候
◎郵劵代用は一割增振替貯金貳錢增

廣告料		
等級	一頁	半頁
特別	金拾圓	代六圓
普通	金八圓	金五圓
一回分		

明治四十四年十月卅一日納本
明治四十四年十一月一日發行

編輯人　益富政助
發行兼印刷人　伊庭孝
神奈川縣川崎町砂子百三番地
發行所　廓清發行所
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發賣元　警醒社書店
（振替東京五五三番）

注意｛總て本會及び本誌に關する事務は東京神田美土代町三ノ三廓清會本部益富政助宛御交涉を乞ふ

(明治四十四年七月十八日第三種郵便物認可)(毎月一回一日發行)
(明治四十四年十月卅一日納本)